

ジェジュイット、ジャンセニ スト、フィロゾーフ

——フランス啓蒙運動の発生と方向——

高橋安光

『ラ・パンセ』第九十号に載せられたマルセル・コルニュ氏の巻頭論文『開かれた眼⁽¹⁾』を読んだ私は、大袈裟な表現かも知れぬが、疾うに癒着していたはずの傷痕から膿がにじみ出ているのに気付いた時のような驚きを感じた。それはソビエトのフルシチョフ首相がパリを訪問する直前に左翼の立場からその歴史的意義を啓蒙的に説いたものであるが、コルニュ氏はフルシチョフの訪問を歓迎しない一部の思想家たちの発言をつぎのように引用しているのである。

「或る人々はわれわれに言うであろう、否、すでにジェジュイットの神父たちは述べているのだ、君らの議論は曖昧と混乱の上にあぐらをかいている、と彼らは断言する、たしかにニキタ・フルシチョフという人間は、彼が示す人の好き、彼が発する泥くさいユーモア、あけすけな大胆さ粗暴さ癡猛さ憤激によって、たとえそれらが難問題を回避するための手段を提供するものだとしても、或る種の同情をひき寄せずにはおかない。彼は家族連れで来るが、単純で穏和な彼の妻はすでに合衆国でも同情を勝ち得ている、と。しかし、と彼らはつづける。こうした証拠は論理的にはなにも証明してはいない、なお悪いことは、この証拠が人々をたぶらかすこともありうるということである、それは一つの思想に加担して一個の人格を引き合いに出すところの一切の証言と同様に或る人々の堅実な心を動揺させる恐れのある具体的権威

(1) Marcel Cornu : Les yeux dessillés ; cf. La Pensée, numéro de mars-avril 1960.

をもつであろう。したがってフルシチョフが体现する思想を根本的に排除して彼を人間として認識しなければならない。」

ここに引用されている言葉はコルニュ氏の註によると『エチュード』1960年3月号に発表されたル・ブロン氏の『フルシチョフの来訪⁽²⁾』という論文から抜き出されたものである。

エスイッタ派と聞けば南都北嶺をも聯想しかねない迂濶な私は20世紀も後半の今日しかもフランスにおいてジェジュイットが200年いや300年前そのままに近い役割を演じていようとは思わなかったのである。こうした一片の論議を楯に取って本論のテーマである18世紀フランスのフィロゾーフ対ジェジュイットの抗争に強いて現代的意義を与えるつもりはないが、人間性の独立という美名の下に人間を社会から疎外し社会そのものに反人間的のレッテルをはりつけようとする思想態度にはジェジュイットの神学者とりわけカジュイスト(詭弁学者)の主要な武器であった^{ディスタインゴ}区別論法が相も変わらず利用されているのである。もし300年をへだてた両者の間になんらかの相異が見られるとすれば、それはおそらく表現形式の時代的相異に他ならないであろう。この点に関連して故ハーバート・ノーマン氏は注目すべき論述を遺している。

「信仰の問題においては、それが人間の最も深い信念と情熱的なかわり合いをもつところだけに、書物の言葉が尊重される時代にあってはなおさら、言葉の暴力が起って来るのは自然である。エラスムスやモアやフッテンやスカリジェルの時代には、罵詈雑言がしばしば深い学識と手を携えて用いられた。言葉の暴力は清教派と国教派、議会議会党と王党派、カトリックとプロテスタント、ジェジュイットとナショナルリストの論争でひとしお激しくなった。ミルトンは政治上宗教上の時事問題をめぐる論争で罵倒的言辞に訴えるのをつねとした。その時代の文筆攻撃でガスパール・スキオピウス(ジェジュイット)がジョゼフ・スカリジェルに加えた攻撃ほど悪意にみちた無遠慮なものはない

(2) J. M. Le Brond: La visite de Monsieur Khrouchtchov; cf. Etudes, numéro de mars 1960.

かった」。 (ハーバート・ノーマン著『忘れられた思想家——安藤昌益のこと——』岩波新書，下巻，第 15 頁)

左右を問わず文筆や弁論より他に権威をもたなかった時代の人々の表現はまさしく痛烈であった。だが今日の思想家たち特に筆力以外の権力を有する人々の発言はなんと上品であることか。ジェジュイットのみならず一般に反動家の見せかけの人間味の背後にどれほど狂暴な暴力がひそんでいるかは，マッカシズムにたいするノーマン氏自身の死の抗議によっても明白である。

因みに辞典の中からジェジュイットに関連する単語をひろい出してみれば，まず名詞としては「イエズス会修道士」といった本義の他に「猫かぶり」，「偽善者」，形容詞としては「破廉恥な」，「背德的な」，副詞としては「老膽に」，「曖昧に」，動詞としては「猫をかぶる」，「陰険な行いをする」，等々の定義が見出されるのである。もちろんこれによってすべてのジェジュイットについて性急な判断を下すことは許されないが，少くとも，ジェジュイットという概念にそうした悪い意味が附与されてしまったという歴史的事実を否定することはできないであろう。

セルゲイ・ネチャーエフは目的のためには手段を選ばぬ権謀術数の革命家としてロシア史上特異な存在であるが，彼の師にあたったバクーニンが彼と不和訣別した直後に彼が立廻るであろうと思われたロンドンのクランディール宛てにこんな警告の手紙を送っている。

「しかし彼は最悪の意味における利己主義者ではありません。なぜなら，彼は自身と革命運動を完全に同視し，自身を危険にさらし，そして殉道者，窮乏，未開の事業の生活を送っているからです。彼は狂信者であり，狂信が彼をしてイエスイットたらしめたのです」。 (荒畑寒村著，『ロシア革命運動の曙』，岩波新書 第 35 頁)

ここでバクーニンが用いているジェジュイットの内容は「狂信的策動家」であり，「偽善者」や「猫かぶり」とはかなり意味を異にするが，いずれにしてもジェジュイットにとって名誉なレッテルとは申せない。一体いかなる事態からそうした通念が生れてきたのであ

うか。またそうした事態にはいかなる問題がふくまれていたのであろうか。ここに焦点をしばってみることが実は 18 世紀フランス啓蒙運動の発生と方向を考察する上にきわめて重要な手懸りとなるのである。もしこうした観点が見当はずれなものであるとすれば、拙論はおよそ雑駁な資料の紹介にすぎないものとなろう。

今日、啓蒙という言葉がきわめて潜越な響きを以て聞かれることは事実である。それは或る特定の事象に関連して用いられることはあっても、かつてのように人間の理性そのものに向けられることはなくなってきた。だが拙論が対象とする 18 世紀とはカントをしてつぎのような発言をなさしめた時代なのである。

「啓蒙とは、人間が自己の未成年状態を脱却することである。しかしこの状態は人間がみずから招いたものであるから、人間自身にその責めがある。未成年とは、他者の指導がなければ自己の悟性を使用しえない状態である。またかかる未成年状態にあることは人間自身に責めがあるというのは、未成年の原因が悟性の欠少にあるのではなくて、他者の指導がなくても自分から敢えて悟性を使用する決意と勇気を欠くところに存するからである。それだから『敢エテ賢明ナレ』、『己自身ノ悟性ヲ使用スル勇氣ヲ持テ』、(ホラテウス)これが啓蒙の標語である」。(カント著『啓蒙とは何ぞや』、篠田英雄訳、岩波文庫、第7頁参照)

カントの啓蒙論は個人的モラルからすればまことに大胆であり有益であるが、社会的イデオロギーとしてはあまりにも観念的であった。こうした観念的な啓蒙観が 18 世紀の啓蒙思想を思想としてよりは運動として把握することを妨げてきたのである。否、むしろそれは運動よりも闘争と言った方が適切である。

奇異に映ずるであろう表題について一言するならば、最後のフィロゾーフは上記の二者に倣って形式上片仮名にしたのではなく、「哲学者」という邦訳名をここにあてはめることが不当であり而も他に適訳を見出すことができなかったからである。なぜならば、18 世紀思想界におけるフィロゾーフの概念は、理神論者、懐疑論者、無神論者、

唯物論者をはじめとしてフィジオクラートやイデオログにまでおよぶ思想家たちの総称であったからだ。しかし拙論においても時に「哲学者グループ」とか「百科全書派」あるいは「反哲学者陣営」といった表現によってフィロゾーフやアンチ・フィロゾーフの特定の集団を示すこともあることをあらかじめ諒承していただきたい。

〔I〕 反ジュジュイット闘争の先駆者たち

新教徒に対抗する旧教徒の内部改革を目指してパリ大学の一角より狼煙を挙げたイエズス会は周到な組織と厳格な規律によって「より大いなる神の栄光に向って⁽¹⁾」活動を開始した。この至上の目的に到達するために彼らをもっとも有効な手段として着目したのが当時放任状態にあった教育事業である。それは単に教育制度上のみならず教育内容上からも画期的意義を有するものであった。1539年イエズス会の創立者イグナチウス・ド・ロヨラは同志9人と共に『イエズス会規大要』を作成した。この『大要』から生れたのがジュジュイットの学院の運営を基礎づけた『学事規則』である。この『規則』の中には学院の教材は当代最善の作品を採用すべきことが決められてあり、実際彼らが用いた教材には当時のすぐれたユマニストやプロテスタントの著作までふくまれていたのである。すなわちコメニウスやフォシウスやメランヒトン等の作品が教授されていたのだ。それは「敵を討つには敵の武器を以てする」というロヨラの戦術であったとしても、それが智的教育で果した客観的役割は高く評価されるべきであろう。事実、ジュジュイットの学院に学んだデカルトをはじめ優れた哲学者や文学者や政治家たちは、そのほとんどが卒業後はジュジュイットに反旗をひるがえすにいたったとはいえ、従来の教育機関からは望みえなかった恩恵をジュジュイットの学院で受けることができたのだ。

『百科全書』の神学および哲学の諸項目の重要な執筆者であり『宗教裁判所審問官提要⁽²⁾』(1762)の著者として有名なモレレ師(1727—

(1) Ad majorem Dei gloriam.

1819) は『18世紀覚書』の中で彼が8歳から6年間在学したりヨンのジェジュイットの学院の模様をつぎのように描いている。

「私はジェジュイットの学院で勉強した。そこでは私の身分が低かったために最初の教師たちから無視され、他に案内者をなんらもたなかった私は、第6学年および第5学年ではつねにクラスの最下位にいて毎土曜日には他の生徒への見せしめと訓育のためかならず鞭で打たれたことを憶えている。第4学年になって私は幸いファブリという名前の若いジェジュイットの教師のうちに優しい人間味のある人物を見出した。彼は私になにがしかの才能を認め、私がそれまで苦しんできた圧迫から私を引き出してくれた。私は自分がなんらかの価値をもちうることを知った。私は一層勉強に身を入れたので80人から100人もいた私たちのクラスの中でたちまち優秀な生徒の一人となり、つねに上位を占めるようになった。その学年の終りには一等賞を2個も獲得した。同じ教師の下で訓練し進歩をつづけた私は第2学年では1等賞を2個と2等賞を1個を取った。私は他のささやかな成功の中では私が翻訳が非常に旨かったことを憶えている。また私はホラチウスのオードを思想の純粹さを害わずきわめて容易に別の調子の詩句に直した。その言い廻しにはなにかしら典雅なものがあった。と私は信じている。修辞学年の私はそれほど幸運ではなかった。そこで私の出会った教師はボン・ド・ヴェスというプロヴァンス生れの貴族出身のジェジュイットであった。彼は貧乏商人の息子のささやかな才能などあまり重んじなかったし、もちろん多くの場合私に正当な評価を下さなかった。私の進歩はまた中断されてしまった。しかし私はすでになんらかの立派な原理となんらかの趣味をもっていた。私はたえずホラチウスやユヴェナリウスやラ・フォンテーヌや『田舎人への手紙』を読んでいた⁽³⁾」。

(2) L'abbé Morellet: Manuel des inquisiteurs, à l'usage des inquisitions d'Espagne et de Portugal, ou Abrégé de l'ouvrage intitulé: Directorium inquisitorum, composé vers 1358 par Nicolas Eymeric, Lisbonne, 1762.

この回想は信頼するに足るものであった。というのは、ディドロやダランベールやチュルゴアの親友として反ジェジュイット闘争に参加してきたモレレ師は反面ではやはり友人のドルバックの無神論にたいして彼なりの批判を行うことを躊躇しなかったほどの卒直な人物であったからだ。たしかにジェジュイットの学院生活には階級的差別待遇が存在した。ヴォルテールも自伝の中でルイ・ル・グラン学院の寄宿舎で貴族の子弟が1人部屋を与えられていたのにたいして町民の子弟は5人部屋に押しこめられていたと述べているからだ。にもかかわらずモレレ師の追憶の中には無邪気な自尊心に満足した少年の面影が見出されるのである。それはジェジュイットの学院がかならずしも憎悪を以て語るべきものではなかったことの証左である。特にそれが古典教育の面ですぐれた技術を提供していたことはフィロゾーフ自身も認めているところであるのだ。ポレ神父とヴォルテールの師弟関係はそのもっとも顕著な効用の現れとみるべきであろう。こうしたジェジュイットの教育活動はおそらく彼ら自身の予想を裏切ったとも言うほどの成果を産んだのである。

教理についてみるならば、神秘的体験と絶対的恩寵を主張するプロテスタントより人間の自由意志を認めスコラの精緻な体系を駆使するジェジュイットの方が人間的であり近代的であるかに見えた。だが実はここにこそジェジュイットの墮落の根本原因がひそんでいたのである。なぜならば、宗教の本質は教義ではなく信仰にあるのであり、信仰は近代的合理的であるよりも原始的神秘的であるからだ。しかるにペラジアニズムあるいはモリニズムを奉ずるジェジュイットは教理において近代的人間的であることに甘えて却って神への道から遠ざかるという結果に陥ったのである。彼らがいかに素朴な敬虔と道義から逸脱して悪徳の正当化に狂奔したかはカジュイストたちの発言によって証明されている⁽⁴⁾。

(3) Cf. Mémoires de l'abbé Morellet sur le XVIII^e siècle et sur la Révolution, Paris, A la librairie Françoise de Ladvocat, Palais Royal, 1821, t. I, p. 3—4.

「私の考えでは、なんらかの思考や意識的な配慮や道徳上の悪意もしくは悪意の危険あるいは明白な疑惑や疑念によって先行されないかぎりでの意志の同意の中には大罪は存在しない。したがって人間が大罪を犯すためには、彼は行為が悪であり悪意の危険が存在することに注意を払うべきであり、そこになんらかの疑惑あるいは少なくとも疑念をもたねばならない。これが先行しないかぎり無智も不注意も忘却もまったく自然であり不可抗的とみなされる⁽⁶⁾」。

罪惡にとってこれほど有利な弁明を見出すことはできないであろう。ここで正当化された良心の怠慢あるいは無力を環境という言葉に置きかえた論法ではこうなる。

「われわれはみな個人の権威によって何人をも殺害することが許されていないと同様に嘘言が一般に禁じられているという自然の掟を知っているが、これらが現況では許されると思わずにはいられないような境遇もありうるのである⁽⁶⁾」。

この論者が問題とした環境は実際には親の仇を討つとか重病者を慰めるといった場合にのみあてはめらるべきであったとしても、この論法が一般の殺害や嘘言にどれほど有力な逃げ口上を提供したことであろう。われわれが彼の善意を信ずる気になれないのは、すでに彼の先輩のジェジュイットたちがつぎのような狂信的さらに破廉恥な発言を行っているからである。

「神の命ずるところであれば、無実の者を殺し、盗みをはたらき、姦通することも許される。なぜならば、神は生死一切の支配者であり、神の命令を遂行することは義務であるからだ⁽⁷⁾」。

(4) Cf. *Doctrines morales et politiques des Jésuites, textuellement extraits et traduits des écrivains de la Compagnie de Jésus*, Paris, Jules Labitte, 1844, 392 p.

(5) *Ibid.*, p. 22, Thomas Sanchez, *Opus morale*, 1614.

(6) *Ibid.*, p. 27—28, R. P. Herm. Busembaum, *Societatis Jesu, SS. theologiae licentiati, theologia moralis, nunc pluribus partibus aucta à R. P. Claudio Lacroix, theologiae in universitate Coloniensi doctore et professore publico. Editio novissima, etc. Coloniae, 1757.*

「たとえ僧侶が姦通者であっても、彼が十分に危険を知りつつ姦婦の家に入り、その夫から襲われて自己の生命あるいは同僚を守るためにその夫を殺すならば、彼は不正を犯したとは思われない⁽⁸⁾」。

これらの記録が証するように、当時のジェジュイットが罪惡に示した媚態は吾人の想像を絶するものであった。罪惡にたいする不感症は希望を失った最下層の民衆と墮落した上流社会人の好むところであったから、こうした詭弁学者の発言が権力者と浮浪者を味方にひきつけるために大きく役立ったであろうことは容易に推察される。こうしてジェジュイットは世俗への妥協と権力への追従によって背徳の道をたどり、逆説的に言えば、「より大なる神の栄光」のためにも自らの破滅を招かねばならなかったのである。

所謂「ブル・フォンテーヌ計画」について。

「ブル・フォンテーヌはバリから16・7里はなれたヴィレール・コート・レッツの森に建てられたシャルトル会修道院である。私はジャンセニズムの初期の首領たちが1621年頃そこに会合して教会にたいする彼らの反抗の総計画を作ったことを示そうとしているのである。ポワチエの初審裁判所の国王任命首席弁護士フィロー殿は『ジャンセニズムの新学説に関してポワチエに起った事態の法律的報告』の中でその会合で何が行われたかをわれわれに物語ってくれている。私はここでその報告の全文を引用する、なぜならば、それはこの著作全体の基盤であり、私の企図する証明の中で頻繁にそれを引用しなければならぬから⁽⁹⁾」。

これは1755年イエズス会士ソヴァージュ師によって発表された『ブル・フォンテーヌ計画の真相』の書き出しである。彼が引用す

(7) Ibid., p. 82, Sancti Thomae Aquinatis Summae Theologicae compendium, auctore Petro Alagora, theologo Societatis Jesus, Lutetiae, 1620, Rothomagi, 1635.

(8) Ibid., p. 93, Hernicus Henriquez. Summae Theologiae Moralis, t. x, 1600.

(9) Cf. Abbé Sauvage: La réalité du projet de Bourg-Fontaine, démontrée par l'exécution, 2 vols, Paris, Chez la Veune Dupuy, 1755.

るフィローなる人物の報告（実はこれも一僧侶からの又聞きということになっているのだが）によれば、ブル・フォンテーヌに集った顔ぶれは、サン・シラン師、イーブルの司教ジャンセニウス、ベレイの司教ピエール・カミュ、ソルボンヌのフィリップ・コスポー、アントワヌ・ダンディリー、シモン・ヴィゴールの6名であった。特にサン・シラン師は計画の積極的推進者として描かれている。ソヴァージュ師によれば、これら6人のジャンセニストはイエス・キリストの宗教を打倒して自然宗教を確立することを誓い合い、そのための手段として、悔悛と聖体の秘蹟を攻撃し、教会の指導者に不信をまきおこし、将来の宗教会議（ジャンセニストはこれを法皇の権威の上に置いていた）に訴えること、を決定したとされている。われわれは、このブル・フォンテーヌ計画なるものが果して実在したかどうか、またソヴァージュ師が言うようにジャンセニストが100年間も忠実にこの計画の実行に努力してきたかどうか、をここで吟味するつもりはない。われわれが問題としたいのは100年以上も前の不確かな事件を持ち出してまでジャンセニストを攻撃する理由が何であったかということである。それはブル・フォンテーヌ計画の有無にかかわらず1世紀以上にわたってつづけられてきたジェジュイットによるジャンセニスト圧迫がジャンセニストの優勢（一時的ではあるが）に変わりつつあった1755年当時の宗教界の動きによって説明されよう。すなわちソヴァージュ師の著書はまさに倒れんとしていたイエズス会の最後のあがきを反映したものである。そうした事態の詳細については次章にふれるとして、ソヴァージュ師よりも50年前に而も異った立場からブル・フォンテーヌ計画に言及している一人の思想家を紹介しなければならぬ。それは一般にフィロゾフの先駆者とみなされているピエール・ペイルである。彼は大著『歴史的批判的辞典』の「アントワヌ・アルノー」の項でこの問題にふれている。先に列挙したブル・フォンテーヌの6名の会合者の名前はフィローの報告書原文中では頭文字で示されていたので第5番目のアントワヌ・ダンディリーは一般にアントワヌ・アルノーと信ぜられたし、フィローの説明もアルノ

ーを指しているかに受取れるような書きぶりであったのだ。ペイルはアルノーが 1621 年には 9 歳でしかなかったという反駁の余地なき証拠をつきつけて世評を訂正すると同時にフィローの偽瞞ぶりを非難するという態度に出ている。

「父親（アントワース・アルノーの）にたいするデュ・プレクスの誤ちもポワチエ初審裁判所の国王任命弁護士フィロー氏が 1654 年息子について発表した伴りに比較すれば物の数ではない⁽¹⁰⁾」。

ペイルはソヴァージュ師が金科玉条とするフィロー報告を虚説として排撃していたのである。しかしフィローの原文には頭文字だけで示されていたのだからアントワース・ダンディリーにたいする誤認の点だけではペイルがこれほどフィローを攻撃する理由はなかったはずである。しからばペイルの真意は何処にあったのか。それはペイルが同項目の脚註において詳しく述べているアルノー家とジェジュイットの永年にわたる確執の歴史によって明らかである。ペイルがジェジュイットにいただいていた憎悪は並々ならぬものであったのだ。オランダに亡命した新教徒ペイルのこうした姿勢が 18 世紀のフィロゾーフたちに受けつがれてフランス啓蒙運動の基本的態度となるのである。

ジャンセニウス著『アウグスチヌス』(1640) やアルノー著『頻繁なる聖体拝領について』(1643) をめぐるジェジュイット対ジャンセニストの論争の歴史はあまりにも有名である。だが前述したようにジェジュイットの老練な教理を反駁することは容易でなかったし、信仰そのものを論争しても埒あくものでなかったから、ジェジュイットにたいするジャンセニストの攻撃はかならずしも功を奏することはできなかった。その中でパスカルの『田舎人への手紙』(1656) が画期的成功を収めたのは、彼が先輩たちの教義論争から抜け出て道徳論争の道を選んだからである。ラシーヌがこの作品を一つの戯曲であると評したのは意味深長である。というのは、道徳論争が要求するものは神学者や哲学者の知性よりは文学者の感性であり、パスカルのモラリスト

(10) Dictionnaire historique et critique, par P. Bayle, t. I, p. 498, Remarques.

としての天分はそれに打ってつけであったからだ。

だが燎原の火のように拡がって行ったジェジュイットの勢力は「国家の中に国家をつくり」、ルイ王朝の宮廷深く楔を打ち込んだ。ここにいたって反ジェジュイット派は道徳的攻撃から政治的攻撃へと移行する。ルイ・ド・モンベルサン著『ジェジュイットの政略⁽¹¹⁾』(1692)はその傾向を反映したものである。著者は序言でこう述べている。

「この作品は諷刺の体裁をすべて備えているが、それは一般に諷刺という言葉に与えられている意味における体裁に他ならない。なぜならば、ここには、素材において疑問の余地なき且つ一人としてロマン・カトリックに非ざるはなき作者たちの証言に基づかざることは、なんら述べられていないからである」。

著者は自らも正統派信者であると前置きとして本書の筋書をつぎのように要約している。

「読者はここに三つの論説を見出すであろう。第一は全世界にたいするジェジュイットの権力について、第二は彼らがこの権力に到達し且つそれを維持するための手段について、第三は彼らをして未来の破滅におびえさせるところの予言と予想および彼らを全滅させるため或いは少くとも彼らの教団を解体させるためにとりうる正当な手段について、である」。

これをしも著者の言うごとき一般的諷刺とみなすべきであろうか。否、それはもっとも痛烈な意味における諷刺であり、断乎たる告発である。彼はこうした前言に違わずロヨラの生い立ちからイエズス会の成立および各国の宮廷に侵入したジェジュイットのあらゆる陰謀を白日の下にあばき出して見せる。当時のジェジュイットの権力を知る者にとってはこうした作品の出現は一つの驚異であったはずだ。裏返して言えば、それだけ世論の中に反ジェジュイットの傾向が出てきたと言うことができよう。だがもちろん本書は無名出版である。

(11) Louis de Mompersan: La politique des jésuites, Cologne, chez Pierre Marteau, 1692.

ポワチエ大学区における抗争.

教育活動を重視するイエズス会がジェジュイット学院の発展に異常な努力を傾けたことは言うまでもないが、そこで学院と大学の対立という事態が生じたのである。それはパリのみならず各地方の大学区にも見られた一般的現象であるが、ここではとりわけ顕著な対立を起したポワチエ大学区の事件を紹介してみよう⁽¹²⁾。

一般に大学はその学区に存在するあらゆる教育機関にたいする管理権を与えられていたから、ジェジュイットの学院といえども当然その大学長の監督下に入らなければならなかった。17世紀初頭ポワチエに設立されたサン・マルト学院はイエズス会の発展と平行して勢力を得るにつれてポワチエ大学の監督に服することを不満とするにいたる。異った目的を有する両者の対立は宿命的なものであったが、学院側にも少からぬ理由が存在したのである。というのは、当時の大学が与えられた特権の上にあぐらをかいて下部の教育機関にたいし高圧的態度に出ることが多かったからである。サン・マルト学院が大学にたいして行った最初の反抗は1633年5月初旬ポワチエ大学長アマサールが学院を訪れた際に起った院生たちの騒動である。大学長の訪問はいわば大学側の示威に他ならなかったからだ。院長は出迎えもせず、院生たちは授業を放棄して大学長の入門を阻んだ。大学当局は憤慨し院長グトラ神父の一切の特権を剥奪するという処分を行った。学院側も負けてはいない。国王側近に手をまわして大学の処分の撤回を画策した。その結果、同年7月13日、学長アマサールはポワトゥ県知事ヴィルモンテから呼び出され、国王の使者より過日の処分を取消すよう命ぜられたのである。大学側は色を失って高等法院に訴えたが、国王の決定をくつがえすことはできなかった。こうして事件は一旦はサン・マルト学院の勝利に終わったが、この宿命的対立は以後2世紀間にわたってくりかえされ、時にはソルボンヌ大学も介入を余儀なくされたのである。

(12) Cf. Joseph Delfour: Les jésuites à Poitiers, Hachette, 1901.

だが 18 世紀も半ばに達するとジェジュイットもようやく内外に没落の兆候を示しはじめてくる。ポワチエにおいても例外ではなかった。イエズス会士ブリケ神父の事件（1760 年）はそうした傾向の一つの顕れである。大学における概論の講義は各教授の持ち廻りであったが、それに当たった教授は講義を始めるに先立ってあらかじめ教授会に講義案を提出して査閲を求めるべき義務を課せられていた。ブリケ神父はこの義務を回避するために同僚のトリシェ神父らを懐柔しようと図った。トリシェ神父はジェジュイットの教育を受けた人物であるからブリケ神父とはそれまで親しい交際をつづけてきたが、規約を無視しようとするブリケ神父の態度に反感を覚え、再三忠告したが聞き容れられなかったので、他の教授と相談してブリケ神父を教授会に訴えた。ブリケ神父はイエズス会士としての友誼に背いたとしてトリシェ神父を深く怨んだが、教授会の決定に服従して講義案を提出した。それが教授会において審査された結果、キリスト教徒にあるまじき教説（高利貸を是認したものと伝えられる）が述べられているという非難が行われたのである。この論文の審査委員長が他ならぬトリシェ神父であったから、ブリケ神父の憤激はさらに増大した。彼はポワチエのイエズス会を背景としてトリシェ神父および大学当局にたいする攻撃を展開した。トリシェ神父は事件以後はつきりとジェジュイットと絶縁して繰返し加えられる圧迫に勇敢に立ち向いつづけた。この事件はいずれの勝利とも分らぬままに落ち着いたが、事件終了後、ポワチエのイエズス会は当のブリケ神父にたいしポワチエから退去するよう命じているのである。これはイエズス会自体が事の成り行きに不安をいだいた結果であり、自らの敗北をひそかに認めたことに他ならない。

舞台を中央にもどして考察するならば、17 世紀末のカジュイストにたいするポシユエの行動が大きく注目される。当時ジェジュイット最高の神学者とみなされていたシュアレスはカジュイストの頭目であった。

「私はまず第一に言おう、たとえ誓約をなす場合でも多義的表現^{エキヴァケー}を用いることには本質的悪は存在しない、したがってそれはかならずし

偽誓とはならない、と。それがたしかに一般的な意見であることは談話における多義的表現はかならずしも嘘言ではないという論法によって証明される⁽¹³⁾」。

この誓約に関するシュアレスの詭弁がボシュエの憤激を呼び起したのだ。

「私は誓約に関するこのジェジュイットの見解以上に有害なものを知らない。彼は、誓約には意思が必要であり、それがなければ、たとえ法律的に尋問する裁判官に答える場合でも、偽誓の罪はない、と主張するのだ⁽¹⁴⁾」。

ボシュエは 1682 年の聖職者総会でジェジュイットの教理の背徳を糾断しようとした。だがルイ 14 世の許可が得られなかったために計画は延期された。というのも、ジェジュイットは宮廷のほとんどを占有し、ルイ 14 世も専制君主としてあらゆる集會に警戒心をいだいたからである。だが 1700 年にはマントノン夫人の勢力はジェジュイットのそれに匹敵しうる地歩をきずいていた。彼女はジェジュイットを嫌悪して宮廷内に非ジェジュイットの聖職者グループを形成することにつとめた。彼らの尽力によってシャーロンからバリの大司教に転じたノアイユはルイ 14 世に中立的進言を行いうる地位に上った。名門の出身でないために宮廷にたいする影響力をつよく持つことができなかったボシュエはマントノン夫人とノアイユに接近してジェジュイット攻撃の機会を待った。ボシュエの学識と人格を深く信頼していたノアイユは彼の計画に加わることを承諾し、マントノン夫人を納得させた。大貴族の出身であるレンスの大司教ル・テリエ（これはもちろん後にルイ 14 世の懺悔聴聞僧となってジャンセニスト弾圧に暗躍したジェジュイットのル・テリエとはまったく別人物である）もジェジュイットと長年争ってきただけにボシュエの計画に進んで参加してきた。後はルイ 14 世の許可が得られさえすれば良かった。それはノアイユ

(13) *Histoire de jesuites*, par l'abbé Guettée, Paris, Huet, 1859, t. II, p. 594.

(14) *Ibid.*, *Journal de l'abbé Le Dieu*, 12 avril 1700.

の依頼を受けたマントノン夫人の役目である。彼女は巧妙にそれを果たした。だが国王はそこに一つの条件をつけた、すなわちカジュイスト（詭弁家）にたいする非難にはジェジュイットの名前を持ち出さないことである。こうしてボシュエは 1700 年に開かれた聖職者総会にカジュイストの問題を持ち出すことができたのである。この宮廷における陰謀はきわめて隠密のうちに遂行されたのでジェジュイットたちは寸前までそうした動きを発見することができなかった。ようやくそれに気付いた彼らは国王に再考を求め、また彼らに味方する司教たちを動かして万策を講じたが、もはやどうすることもできなかった。ボシュエによって起草された非難文はジェジュイットの反対を押し切って総会で可決された。この非難決議は言いかえれば『田舎人への手紙』にたいする弁護でもあったのだ。

だがここで見落してならないのは、この非難文の短い前文がジャンセニストにたいする非難にあてられているということだ。それにはこんな事情が存在した。ルイ 14 世からカジュイストすなわちジェジュイットにたいする非難の許可を求める際にマントノン夫人たちはジェジュイットの敵対者であったジャンセニストを囫として両者をひとしく非難するのだというように問題を持ちかけたのである。したがって国王との約束を果たすためにもその前文は必要だったのであるが、果してボシュエの真意をどこまでそこに見出すべきであるかは問題であろう。ともかくジャンセニストにたいする非難をふくめたという点で安心したルイ 14 世はこの決議文の公表を許した。ボシュエの天才的雄弁から生み出されたこの非難文がジェジュイットに与えた打撃は想像に難くあるまい。この事件によって彼らはノアイユとボシュエに烈しい憎悪を燃やすと同時に彼らの背徳を最初にあばいたジャンセニストにたいする復讐を決意したのである。

回勅「ウニゲニトゥス」(1713)

オラトワル派のケネル神父が『福音書の道徳の要約、すなわち、四福音書についてのキリスト教徒的考察、これを読みはじめる人々の読書と省察を容易にするために⁽¹⁵⁾』を発表したのは 1671 年であった。

ケネル神父は本書において恩寵の絶対性、教皇権の否定、教会の民主化、聖職者の戒律、等を福音書からの引用によって強調しているのである。これについてはジャンセニストのニコールが書簡の中でつぎのよう激賞している。

「私はこの新約に関する総括的著作が有益なものであることを確信しています。これ以上に僧侶にとって立派な、教会にとって有用な、世のすべての人々にとって適切な作品を見たことはありません⁽¹⁵⁾」。

当時シャーロンの司教であったノアイユ（後に本書の異端が問題となった時にバリ大司教となっていた彼は前言を否認するが）もこの作品を積極的に支持した一人である。1698年ベネディクト派のドン・チェルリ・ド・ヴィエクスヌが『聖職者の諸問題』においてケネルの著書を問題とするに及んで急速に反響を呼ぶこととなった。それはケネルの同書が世に問われてより実に27年後である。ジェジュイットはジャンセニスト的偏向を指摘された本書の論争に絶好の機会を見出した。彼らはジャンセニストの封建貴族的性格に反感をもちつづけていたルイ14世を動かしてジャンセニストを一気に追放しようとする策謀をめぐらした。その結果がクレメンス11世による回勅「ウニゲニトゥス」の発布である。この回勅はケネル神父の作品の中から101ヶ条の文章を抜き出して異端と断じたものである。それは1713年9月8日教皇庁より発表され、ルイ14世の命によって翌年2月15日バリ高等法院の認定を受け、発効した。ルイ14世はこの回勅の承認に反対した人々を宗教会議にかけて追放せんとしたが、1715年9月1日には死んでしまうので果すことはできなかった。著者ケネル神父はオランダに亡命せざるをえなかった。だが彼は同地であって『6ヶ国語対訳聖書』全七巻（1721）を監訳したりして「ウニゲニトゥス」

(15) Père Quesnel: *Compendium moralis Evangelicæ sive Considerationes christianæ super textum quatuor evangelistarum*……quo ejus lectio et meditatio facilius reddaturis, qui illi se applicare incipiunt.

(16) Cf. *Nouvelles lettres de Nicolas*, Lettre 40.

の不敬偽瞞を暴露しつづけた。やはりオラトワール派に属していたラ・ポルド神父は回勅が発表されるや3日間でつぎの駁論を書きあげたと伝えられている。

『1713年9月8日の回勅にたいする幾何学者の方法による吟味、すなわち、この回勅を審判するための一般的原則を確立する論説⁽¹⁷⁾』

「ウニゲニトゥス」の承認に反対したために国王の不興を蒙って高等法院を去った法官アンリ・フランソワ・ダゲソーは当時の模様についてつぎのように追憶している。

「その回勅はそれを読んだ人々と同数の敵対者を見出していた⁽¹⁸⁾」。

この回勅がいかにかに理不尽なものであったかは、ジェジュイット以上にジェジュイット的と言われたボワチエの司教ヴェルトリユが「これはジャンセニストの陰謀である」と叫んだと伝えるエピソードが逆証するところである。だが事態はルイ14世の死によって変貌せざるをえなくなった。摂政オルレアン公はブルゴーニュ公の友としてジャンセニストを敵にまわすことを不利と見做し、先帝によって追放された人々を呼びもどし、ノアイユを枢機卿に推挙し、ダゲソーを大法官に登用した。しかしそれらは多分に政治的掛引きであって問題の解決にはならなかった。

フィロゾーたちがようやく登場してくる18世紀初頭の思想界および政情はこのように回勅「ウニゲニトゥス」をめぐる対立によって特色づけられていたのだ。こうした出発がフィロゾーフたちの性格と方向に決定的影響を与えたことはもちろんである。

〔II〕 フィロゾーフのジェジュイット攻撃

およそ1世紀にわたってジェジュイットに果敢な抵抗をつづけてき

(17) Père La Borde · Examen de la Constitution du 8 septembre 1713 selon la méthode de géomètres, ou dissertations dans lesquelles on établit des principes généraux pour juger cette constitution.

(18) Histoire générale du mouvement janséniste, par Gazier, t. I, p. 240.

たジャンセニストも 18 世紀に入るやポール・ロワイヤルにたいする弾圧 (1710) や回勅「ウニゲニトゥス」による圧迫によって亡命あるいは沈黙をよぎなくされ、急速に後退して行った。だが彼らの後退の本質的原因はジェジュイットによる迫害以上に彼ら自身のうちにあったと言うべきである。というのは、本来が超俗的であり主として貴族階級から支持者を得ていたジャンセニストはもはや 18 世紀の新興ブルジョワジーの利害やイデオロギーを代表することができなくなってからである。したがって世俗的なジェジュイットの方が憎まれつつもなお生きのびるといふ皮肉な結果になるのだ。もちろんジャンセニストがまったく影をひそめてしまうわけではなく、ジェジュイットにたいする闘争においては時にフィロゾーフの戦列に加って少からず活動をつづけて行くのであるが、闘争の主導権は新興階級の代弁者たるフィロゾーフの手に委譲せざるをえなくなる。

ダルジャンソン侯の『覚書』の中には侯自身がジャンセニストに同情をもっていたばかりでなくルイ・ル・グラン学院時代からの親友ヴォルテールを通じてフィロゾーフと密接な関係を有しただけに 18 世紀的ジャンセニストの微妙な立場を伝える記述が 2・3 見出される。

「1738 年 10 月。私の弟は高等法院と内閣の事件について教会のそれと関連させて私に語ったことがある『兄さん、貴方はややジャンセニスト的ですね』と。それにたいして私は答えた『かならずしもそうではないが、私の信条告白はこうなんだ、私がたえず強く反対したのは迫害と宗教をもたなくせに野心と食欲から宗教を利用する偽善者とにたいしてなのだ』と⁽¹⁾」。

「1789 年 2 月。ジャンセニスムと迫害の事件に関する私の信条告白は教理と教会の規律に照すならばきわめて健全であり幸運に値するものであるが、政治的にみればきわめて異端であり失脚に値するものである。

第一の問題については私はこう考える、俗人は教会に、法皇に、最

(1) Mémoires du Marquis d'Argenson, éd. Bibliothèque Elzévirienne, 1857, t. I, p. 211—212.

大多数の司教に服従すべきであり、したがって回勅は善であり、それは完全に受け容れらるべく、しかも純粹卒直にそうあるべきだし、司教の機関はそこにおける良き註釈であり悪用の予防であり、俗人はそのような論争についてあげつろうべきでなく、第二階級の聖職者たちも同然であり、彼らは教理を説くためにある司教と誤ることのない教会の主力に盲目的に服すべきであり、もし個人の受諾の証明書に絶対に署名するよう強制されるならば、人はそれをなすべきであるし、私自身もためらうところなくそうするつもりである、と。

だが政治的にみれば、私の職務は司法官および国務大臣のそれであるから、私はこう考えるのだ、俗人たちから強制的受諾を求めることは反政治的であり、世の人々すべてを安心させねばならぬし、現にやっているようにジャンセニストをとことんまで追いつめることは悪であり、異端はそれ自身の美しき死によって死なせるべきであり、したがって異端の伝播は温容と説教によってのみ妨げるべきであり、この手段の方がモリニスト（ジェジュイット）によって勧められた迫害よりも確かなものであろう、と⁽²⁾。

これはおそらく信仰公認証書の署名（「ウニゲニトゥス」発布以後フランスにおいて実施された一種の宗門改メ）をめぐって生じた高等法院と政府および教会の対立の際に書かれたものであろうが、政治と宗教の分離に名を籍りて暗にジャンセニストにたいする同情を示し、ジェジュイットの不寛容を鋭く批判しているのだ。しかし以上にも示されているようにジャンセニストの時代的役割はすでに終わってしまったのである。そこで彼らからバトンをうけ継いだフィロゾーフたちがジェジュイットといかように対決して行くかを考察してみることにする。

『百科全書』の項目「ジェジュイット」等。

ディドロおよびダランペールを中心とする多数のフィロゾーフの協力から生れた『百科全書』第一巻が公刊されたのは 1751 年 7 月 1 日

(2) Ibid., p. 212—213.

である。すでに前年の 1750 年 10 月にはディドロが書いた『百科全書趣意書』が一般に流布されていたから反哲学者陣営とりわけジェジュイットは手ぐすねひいて本書の出現を待ち受けていた。果せるかなジェジュイットの機関紙『ジュルナル・ド・トレヴー』は編集者ベルチエ神父を先頭に立てて猛烈な攻撃を開始してきた。ディドロは当然それを予想していたので直ちにベルチエ神父に宛てた二通の書簡を矢つぎ早に公表して応戦した。その題辞には「パエトスよ、これは苦痛ではありません⁽³⁾」(出典、プリニウス、書簡、第3巻、第16)というラテン文が掲げられている。これは、国王クロードミアヌスにたいする謀反に破れたパエトスが自決をせまられていた時、彼の妻アリアが夫をはげますために自らの胸に突きさした剣を夫にさしのべながら吐いた言葉である、と伝えられる。この昂然たるディドロの反駁に一層いきり立ったジェジュイットがあらゆる策動によって『百科全書』の出版を妨害したことは言うまでもない。実際、彼らの妨害は一時的には成功を収めたのである。まず 1752 年 2 月 7 日の政令によって『百科全書』の最初の二巻の販売が停止された。有名なプラード師の論文が非難されたのもこの時である。というのも、1751 年 11 月 8 日ソルボンヌで発表されたプラード師の学位論文中にキリスト教の奇蹟にたいする自然宗教的批判を見出したジェジュイットは師を百科全書派の手先とらんでソルボンヌに告発したからである。ディドロは直ちに『プラード師の弁護』を発表したが、プラード師は学位を取消され国外に亡命した。そこで政府も引き合いに出された『百科全書』になんらかの処分を行わざるをえなくなった。それが販売停止という軽い処分に終わったのは当局側にマルゼルブのような自由主義者がいたからであるが、遂に 1758 年にいたって国王からの出版特許権が取消され、1759 年には法皇の『百科全書』非難の教書が発せられ、バリ大司教およびソルボンヌもこれに同調したのである。こうした弾圧下で公刊されつづけた『百科全書』の中から「ジェジュイット⁽⁴⁾」の

(3) 《Paete, non dolet》.

項をとりあげてみることは、それがディドロ自身の執筆によるものであるだけに殊更興味ぶかく思われる。それはまずつぎのような見出しと説明からはじまっている。

「ジェジュイット、男性名詞、(近代盲信の歴史) イグナチウス・ド・ロヨラによって設立され、イエズス教団あるいはイエズス会という名で知られる宗教団体。われわれは自分たちの意見はなんら述べないつもりである。この項は各裁判所の検事長の報告、高等法院によって印刷された覚書、各種の判決、新旧にわたる歴史、最近かくも多数出版された関係文献等からの簡潔忠実な抜翠に他ならないであろう」。

こうしてディドロは典拠を示しながらロヨラの改心、イエズス会の組織、ジェジュイットの永年にわたる犯罪事実を列挙する。そして個人的見解は述べないつもりだと断りながらもジェジュイットの没落についてこう述べている。

「だがどんな事件にも原因はある。このイエズス会の思いがけぬ急速な没落の原因は何であったか。以下は私の心に映じたままの若干の原因である。

哲学的精神は独身生活を排斥してきたが、ジェジュイットは他のすべての宗教団体同様に今日の人々の修道院にたいする無関心に憤激した。

ジェジュイットは文人たちが彼らの執拗陰険な敵(ジャンセニスト)と対抗して彼らの味方になろうとした時に文人たちと仲違いした。そこから何が起ったか。文人たちはジェジュイットの弱点をかくしてやるどころか、逆に暴露し、彼らを脅かしていた陰気な狂信者たちに何処からジェジュイットを攻撃すべきかを指示してしまったのだ」。

これはフィロゾーフを敵に廻すことがどれほど不利であるかを説いたものであるが、それにもまして注目されるのはフィロゾーフ、否、ディドロがジャンセニストにたいしていただいていた感情である。この悪感情は殊更ディドロ個人のものであったかも知れないが、すでにジ

(4) Encyclopédie, éd. 1765, t. 8, p. 512—516.

ジャンセニストがフィロゾーフと完全に対立する場に追いやられてしまったことを示すものであろう。この項も終りに近づくにつれて一層ディドロ個人の見解が打ち出されてくる。

「彼らの『ジュルナル・ド・トレヴー』の編集者は噂通りの好人物であるが月並作家で貧相な策士であり、その舌足らずな小冊子を以て彼ら自身に何千という敵をつくり、一人の友もつくらなかったのである」。

これがベルチエ神父に当てつけたものであることは言うまでもない。そしてディドロはつぎのように結論する。

「私がこれらのことを書いたのはジェジュイットにたいする憎悪や憤激からではない。私の目的は、彼らを追放した政府や彼らを裁いた司法官たちを正当化することであり、この教団に属する僧侶たちが私の信ずるのように将来再び成功して王国に地歩を築きなおすであろう時に彼らがいかなる条件の下でそれを期待しうるかを彼らに教えることである」。

この峻烈にして寛大な御詫宣はディドロの完全な勝利感を示すものである。したがってこの論稿が書かれたのはジェジュイットがフランス国内で解散を命ぜられた 1764 年以後であると考えられよう。すでにパリ高等法院は 1762 年 4 月 1 日の決定によってジェジュイット系の学院の閉鎖を命令しているのであるが、その時ディドロは愛人ソフィー・ヴォラン嬢に宛てた書簡の中でこう喝破しているのだ。

「友よ、これこそジェジュイットの埋葬状である」。 (1762 年 8 月 12 日付)

ジェジュイットにたいするディドロの皮肉な期待はどのような形で実現されたのであろうか。1764 年フランスから追放されたジェジュイットは 1767 年イスパニヤからも放逐され、1773 年には法皇クレメント 14 世の教書によって解散を命ぜられ、大革命にいたってほとんど影をひそめてしまうが、王制復古と共にラザリスト、バカナリスト、信仰の父等の名称にかくれて再び登場してくるのだ。しかし彼らはもはや 18 世紀以前におけるような世俗的権力を掌握する場を失ってし

まっていた。この意味においてディドロの予想は適中したと言ってよからう。

先にもふれたようにディドロがジャンセニストにいただいていた感情はジェジュイットにおとらず悪いが、やはりディドロが執筆している「ジャンセニスト」の項目はその奇妙な定義によって吾人の意表をつくものでさえある。

「ジャンセニスト。男性名詞、(流行)、これは淑やかな婦人たちが使用したベチコートであり、それ故にジャンセニストと呼ばれた」。

たしかに現今の辞書にも「ジャンセニスト」の項には昔の婦人が用いた長い手袋の意味が記されているが、いずれが正当であるかは別として、右の説明は明らかにディドロ独得の巧妙な諷刺と考えるべきである。われわれは『百科全書』をめくってゆくうちに題目では予想もされなかった人物や事柄にたいする痛烈な皮肉に出会うことがしばしばあるが、その多くはディドロの執筆項目に属するのである。このように思いがけぬ所に仕掛けられていた時限爆弾が反フィロゾーフたちにどれほど多くの打撃を与えたことであろうか。

最後にディドロが反ジェジュイット闘争をいかに重要な使命とみなしていたかを証明するために「ラングル」(ディドロの生れた町)という項目の一節を紹介しておきたい。

「現代のラングルは有名な文人を多く産み出し、彼らは幸いにもみんな故人というわけではないが、私は彼らのうちで前世紀の人物としてはバルビエ・ドクール只一人を挙げたい。なぜならば、彼はフランス・アカデミーがかつて有したもっともすぐれた臣下の一人であるから。……バルビエ・ドクールはポール・ロワイヤルの諸氏の友であり、彼が憎悪するジェジュイットに反対して多くの作品を書いた。彼は1694年53歳で赤貧のうちに死んだ」。

バルビエ・ドクールはラングルのジェジュイットの学院(ディドロもここに5年間在学した)に学び、後にパリ高等法院の弁護士となったが、熱烈なジャンセニストとしてジェジュイットと論戦を交え、フランス・アカデミーに入会しては『アカデミー辞典』の編纂に重要な

役割を演じた人物である。ディドロがバルビエ・ドクールをあえて郷土のもっとも偉大な先輩と推したのは、ドクールの反ジェジュイット闘争にたいする彼自身の強い共鳴によるものではあるまいか。

ディドロを中心とする百科全書派とジェジュイットの争いは 10 数年にわたってつづけられるが、すべての宗教家が『百科全書』を敵視していたわけではなかったことは、以下の証言によっても明らかであろう。

「ペリゴール地方における『百科全書』予約購読者の 40 名にのぼるリストの中には 24 人の司祭がふくまれていた⁽⁵⁾」。

彼らのすべてがフィロゾーフの期待した目的を以て『百科全書』を購入したとは言えないであろうが、階層的利害の矛盾によりやがて不満をいだきはじめてきた下級僧侶たちが『百科全書』の中に自分らに有利なイデオロギーを認めたであろうことは否定しえないであろう。それは大革命当時に発表された革新的聖職者たちの文書の中に『百科全書』から借用された表現が少からず見られたという事実によって一層よく裏づけされる。

ディドロ作『私生児』とフレロンの書簡。

ディドロは 1757 年彼の最初の戯曲『私生児』（5 幕散文）を発表した。だが実際にそれが上演されたのは 14 年後の 1771 年 9 月 26 日（木曜日）フランス座においてであるが、しかも一度しか上演されなかった。1771 年 9 月 28 日（土曜日）付のレスピナス嬢からコンドルセに宛てた手紙には「私が明日の日曜日『私生児』を観に行くことをムーロン夫人に伝えて下さい」とあるから二度目の上演が予定されていたことはたしかであるが、それが行なわれなかったのは何故であろうか。小場瀬卓三氏の評言を借りるならば、「1751 年以後劇壇は一時無風状態を呈した。この状態が乃公出でずんばといった気概をディドロに与えたのか、それとも『百科全書』の監修者として宇宙の森羅万象を見直すことを考えていた彼が演劇にもまた発言権があると考え

(5) Cf. La Révolution, par M. L. Madelin, Paris, 1912, p. 128.

たのか、そこのところは明白でないが、1757年彼は『私生児』とこれに関する三つの『対話』とを合せて出版した。これは彼の最初の戯曲であるが、彼がはやくから演劇に関心をもっていたことは、1748年に出た小説『不謹慎な宝石』のなかにも、これに関する一章があることによって明白である。『私生児』は彼の敵たちに好餌を提供した。というのは、ディドロはこの劇の筋の一部をゴールドーニの『親友』から借用したばかりでなく、たいへんな愚作だったからである。(小場瀬卓三著『演劇と演劇史の十字路で』白水社、第154頁)

『私生児』はニヴェル・ド・ラ・ショセの所謂「お涙頂戴喜劇」の系統に属する新しい町民劇を目指した作品であるが、小場瀬氏も指摘しているように、主観的に過ぎて演劇的効果に乏しい失敗作であった。この好餌に飛びかかってきたのが『文学年代』の刊行者フレロンである。フレロンはジュジュイットの立場を強く支持してたえず百科全書派の作品を『文学年代』に取り上げては非難してきた反動ジャーナリズムの雄であった。彼は早速『私生児』批判を書き上げた。ところが時の大臣で出版関係を担当していたマルゼルブがフレロンにその批評文の発表を見合せるよう通告してきたのである。マルゼルブは当時としてはきわめて進歩的思想の持主であって『百科全書』出版にもかなり好意的態度を取ってきたのである。彼は『私生児』をめぐる紛争がディドロにとって不利になることを予想したのであろうかフレロンに譲歩をすすめてきたのである。切角鬼の首を取れると思っていたフレロンは迷ったが権力に刃向うことの無益を悟って妥協を決心した。この無念やる方ないフレロンがマルゼルブに出した手紙は当時のジュジュイットとフィロゾーフの対立を如実に示すものとして貴重な資料ではあるまいか。

「伝え聞いたところによりますと、貴方は私がディドロ氏の友となることを望んでおられるようですし、お名前は伺えませんでした、もう一人の要路の方もこの結合を心にかけておられるようでございます。私は貴方のお気に召すことを何らか是非やりたいと思っていましたので私のとるべき決意については瞬時も迷いはいたしません。私は

先週の水曜日に私の気持を貴方にお知らせするため仕度をして出かけました。というのは私の本屋が貴方の在宅を知らせてきたからでございます。私は急いで参りましたが、私が到着した時には貴方は出かけられた後でございます。私は早速すでに16頁を印刷した『私生児』の項を印刷中止させました。この大きな項目の代りを書くには一週間以上かかりましたし、印刷の方もほど二倍近くも費いたことでしょう。私は印刷物が期日まで出るように昼夜兼行でこの空隙を埋めるために仕事をいたしました。それでも4・5日は遅れるでしょう。この臨時の仕事のために私は貴方の御機嫌をうかがいに出向くことも手紙をもつと早く出すこともできなかつたのでございます。私は暇になりますと真先に貴方に私が望まれていることについての考えをお伝えする次第でございます。

ディドロ氏は、かつて私を葬り去ろうとのみつとめ現在もおそうしている人々や、ナンシーのアカデミーから私を追放し、ポーランド国王ローレーヌ公が私に与えて下さった保護を私から奪い上げるために全力をつくした人々と結託しておるのです。……………(原文で37行省略)……………

私は彼の敵でもありませんし、彼の友となる気持さえもっていますが、しかし私はこの結合を恐れていることを貴方に隠すことができませぬ。ディドロ氏と彼の取巻連中は文学および趣味に関してはきわめて危険な革新家でありまして私の唯一の領分であるそれらの事柄についてのみ語っております。批判の矢は主として彼らに向けられるべきです、と申しますのも、彼らは或る種の読者をもっていますし、彼らの過失や誤謬はシュヴリエやメロールやラ・モルリエールの類のそれよりも有害な効果をもっております。何人といえども貴方以上に強く人間の知識の進歩と良き趣味の維持に関心をもっておられる方はありません。そこで私は貴方に取えて申し上げます。もしディドロ氏および彼の同僚たちのなすがままを放任されるならば、フランスの文学と趣味は10年以内に滅びてしまうでありましょう、と。もしディドロ氏が私同様に孤立し、いかなる派閥にも陰謀にも加わらないとするなら

ば、私は私たちが手を握り合うことに苦痛よりも快樂を感じるでありましょう。しかし彼は大きな団体の首領ですし、策謀によって毎日に繁殖し増加している大人数の結社の頭目です。彼が彼の友人や同僚や崇拜者に手心を加えるよう私にたえず頼んでくるようになれば、私は『百科全書』やいかなる百科全書派について述べることもできなくなり、私の印刷物からこの辞典や哲学的妄想によって勝手にわれわれを侵すであろう 100 人からの著者たちの作品を除かねばなりませんし、良識ある読者がその欠点を挙げることを私に期待するところの最も検閲に値する著作について報告することを控えねばならなくなるでしょう。そうすると私の印刷物には一体何が残るでしょう。下手な詩や平板な小説、そんなものは私が手を下すまでのことはありません。

ディドロ氏と私を接近させるために彼が一つの作品を公刊したばかりの時機を選んだことはかなり奇妙であることについて貴方の御再考をねがいとう存じます。ディドロ氏がフランス・アカデミーを目指していること、彼のため良かれと望む人々はアカデミー風に書いた彼の唯一の作品である『私生児』を私が愚劣な戯曲であると証明するのを心配していることは、特に眼の利く人でなくても分ることです。以上が少くとも私の推定するところでは事件の核心であります。それが何人かの百科全書派によって考え出された工作であることは賭けてもよいと思います。しかし彼らは貴方が『私生児』について語ることを私に禁ずるにはあまりにも正義の士であられることを充分に知っていたのでございます。

そこで彼らはどうしたのでしょうか。彼らは彼らが当座望むところのものを獲得したならば罠に陥ちこんだ私を嘲笑してやろうと決心して彼の喜劇を物笑いさせないためにだけ私をディドロ氏の行きずりの友とすることを思いついたのです。おそらく彼らは、そうとはっきりは言いませんが、彼らにとって都合の良い間は私に沈黙させることができるという了解を不遜にも考えてさえおるでしょう。ディドロ氏がフランス・アカデミーに入会してしまえば、彼は直ちに私の手に任せられるであろう、と私は確信しています。しかし彼がそこに入るという

ことが問題なのでございます。『私生児』が良識と良き趣味に反するものであることを否応なしに証明する立派な批評がなされるならば、彼の入会は進められないでありましょう。人々が私の友情あるいはむしろ沈黙を求める欲得づくの動機によって私が煽動さるべきかどうか、御判定下さいませ。……………（原文で 54 行省略）……………

私はすでに多数の人々に読者が私の雑誌の中で見ることを待ち構えているような具合に私が行った『私生児』の抜翠を読んでやりましたから、私がそれになんら言及しない理由を尋ねられた時はどう返答してよいか分かりません。またこの作品を分析するために私が取った方法を偶然に人から聞いた誰かがそのやり方を利用して個人の批評を行うことも有り得ます。そうなった私は絶望です、貴方は私がひそかに私の印刷物には載らなかった論稿を印刷させたとお思いになるでしょう。そう思うと私はつらいのです、私がここで前以て疑惑をさけるために策を弄して貴方に先入見を注ごうとしているなどとお考え下さいませ。私はそんな卑劣な仕業はできません、率直と誠意が私の性格です。私は、『私生児』について私が書いたことは一行といえども私の読者の前には現れないであろう、ともっとも正当厳肅な名誉にかけて誓います。

それは私にとって悲しみであり辛いことですが、私は私のとるべき行動について敢えて貴方の御意見をうかがう次第です。もし貴方が私が貴方にお会いできる日時を私に指示して下さいますならば、私は貴方の御命令に服します。

心からの尊敬をこめて、

貴方の極めて卑しき従順なる下僕フレロン

1757 年 3 月 21 日。(6)

もちろんフレロンはしたたか者であるからこの誓いによってディドロと手を握ることなどはしなかったが、当時マルゼルブのもっていた権力はかなり強大なものと思われるのである、というのは、フレロン

(6) Diderot et Fréron, documents sur les rivalités littéraires au XVIII^e siècle, publié avec des notes par Etienne Charavay, Paris, chez Alphonse Lemerre, 1875, 15 p.

は約束通り当分沈黙を守ったばかりでなく、数ヶ月後の『文学年代』に発表された 1757 年 6 月 30 日付の書簡の形式の『私生児』批判はきわめて控え目な論文であったからである。だが百科全書派にたいする譲歩がフレロンにとってどれほど業腹なことであったかはつぎの書簡によっても明らかである。

「私が直接あるいは間接に攻撃されている百科全書の諸項目の覚書を貴方にお送りすることはできません。私は百科全書のすべてを読んだことはありませんし、罪を犯してそれを読むという刑罰に処せられでもしないかぎり、決して読まないであります。しかも、あの人々は私を問題にすると到底考えられないような全く関係のない項目に藪から棒に私を登場させておるのです。たとえば、『しかし』という項には神と私にたいする二つの諷刺があるそうです。しかし彼らが私にたいしてもっとも烈しく攻めたてているのは『批評』という項目です。私の思い出さない或いは読んだことのない他の何千という項目の中にもそれはあるでしょうが。……………(原文で 38 行省略) ……
 ……彼らは思う存分私の悪口を書くがよいのです、私はただの一筆を以て彼らが百科全書の全頁を以て私を傷つけうる以上の損害を彼らの脆弱な文学的存在に与えることを確信しております。彼ら自身もそれを感じています。と申しますのは、彼らの筆は彼らの憎悪に充分奉仕することはできないので、彼らは復讐するために別の手段の助けを求めるからです。その点では彼らはつねに私に勝つでしょう。私は内密の策謀や卑劣な操作の術を知らないからです。私は政府によって認められた文学者として仕事をする、良き市民として生活すること、私の家族を立派に育成すること以外の野心はもっておりません。私は私の行為と著作において宗教と良俗と国家と私の長上を尊敬いたします。私の敵が何を述べようとも、以上がつねに私の考え方と生き方でありましたし、また将来もそうでありましょう。

心からの尊敬と貴方の御好意にたいする深甚の感謝をこめて、

フレロン

1758 年 1 月 27 日」

フィロゾーフはこのフレロンにどのような態度で相対していたのか。それはヴォルテール作『スコットランドの女』（五幕喜劇、1760年7月26日フランス座初演、上演回数14回）の第一幕第一場の冒頭に登場するフレロン（それは後にフレロンの抗議によってワズプという名に書き改められたそうであるが）なる人物の描写のうちに示されている。舞台はロンドンの或るコーヒー店、その片隅のテーブルでコーヒーとペンを置いて新聞を読んでいるフレロンの独白からはじまる。

「なんて厭なニュースなんだろう、20人からの人々に恩恵がばらまかれているのに、私には全然ないとは。自分の務めを果たしたという理由で本端役人に百ギネーの報賞だなんて、大した功績だ。労働者の負担を和げるためにしか役立つ機械の発明者に年金をやっている。水先案内人にもやっているぞ。文学者たちに地位を与えている。しかし私にはなにもない。まだまだあるぞ、しかし私にはなにもない。

（彼は新聞を投げ出して徘徊する）だが私は国家に奉仕しているのだ。誰よりも多くの新聞を書き、洛陽の紙価を高めている私になにもないなんて。私は功績あると思われる連中すべてに復讐したいくらいだ。そうだ、私は悪口を云っていくらか儲けたんだから、これをやりぬけば、私も財産ができるぞ。私は愚者を賞揚し、才人を非難してきたが、これでは食べるだけでもやっただ。財産をつくるには悪口ではだめだ、相手に損害を与えることだ。」

そこへ店の主人のファブリスがやってきて2人の間に対話がはじめられる。

「フレロン、今日は、ファブリスさん、今日は。万事うまく行きますな、私を除いては、私は気が狂いそうです。

ファブリス、フレロンさん、フレロンさん、貴方は随分敵をつくりましたね。

フレロン、そう、私はいささか嫉妬を惹きおこしているのだと思いますよ。

ファブリス、とんでもない、貴方が生み出しているのは決してそんな感情ではありません、まあお聞きなさい。私は貴方に友情をもって

います、だから世間で云っている貴方の噂を聞くと私も腹が立ちますよ。しかしフレロンさん、貴方はどうしてあんなに沢山の敵をつくるのですか。

フレロン、ファブリスさん、それは私に才能があるからです。

ファブリス、そうかも知れませんが、私にそう言うのは貴方だけなんですよ。世間では貴方を無智だと言っていますがね。そんなことはどうでもいいですが、世間ではおまけに貴方を意地悪だと言っています、これは不愉快ですな、私は善人だから。

フレロン、私は善良な心、優しい心をもっていますよ。私は男の悪口は少々言いますが、女性はみんな好きです、ファブリスさん、彼女らは美しいですからね。ところで貴方にそれを証明するために、私はお宅に居られるあの美しい方の部屋に是非とも案内していただきたいですな、私はまだ彼女の部屋で会ったことがないのです。

ファブリス、ああ、フレロンさん、あの若い方は貴方向きではありません、彼女は決して自慢しませんし、誰の悪口も言いませんからね。

フレロン、誰の悪口も言わないというのは彼女が誰も知らないからですよ。親愛なるファブリスさん、貴方は彼女に惚れてるのところがいますか。

ファブリス、とんでもない、彼女の態度には何か高貴なものがあった私などが惚れる気にはなりません。おまけに彼女の美德……

フレロン、あは、は、は、彼女の美德ね……

ファブリス、そうですよ、何がおかしいのです、貴方は美德を信じないのですか。ほら入口のところで馬車が停りました、お仕着せの下僕がトランクを持ってくる、私のところへ誰方様かがお泊りになるんですよ。

フレロン、親愛なる友よ、あの方に私を早く紹介して下さい。」

ここで第一幕第一場は終る。ヴォルテールの描いたフレロンは自惚屋で女好きで権威の前に這いつくばう三文文士となっているのだ。ディドロやグリムやスデーヌがこの芝居を観て拍手を送ったことは想像

に難くないが、フレロンという男は果して客観的にはどんな人物であったのであろうか。その客観性を確認するために 19 世紀の批評家イポリット・リゴーが提供しているフレロンの義兄のロワイユという弁護士の手紙を引用しよう。

「フレロンは私の妹と 3 年前ブルターニュで結婚しました。私の父は二万リーヴルの持参金を与えました。彼は女のためにそれを使い果して私の妹を苦しめました。その揚句、彼は妹をボロ馬車にのせてパリに出発させ、途中は藁の上で彼女を寝かせました。私は飛んで行ってこの無能な男をなじりました。彼は後悔しているような素振りをしました。しかし彼はスパイをやっていて私が弁護士の資格でブルターニュの紛争に介入しているのを知って私を某氏に告発し、私を投獄する命令書を得ました。彼は或る月曜日の午前十時に警官を連れてノワイエ街に自らやって来て、私に鎖をはめさせ、車の中では私の傍につき添って鎖の端を自分でつかんでいました……⁽⁷⁾」。

フィロゾーフの敵の中でもおそらくフレロンほど後世まで悪評を浴せられている人物は少いのではあるまいか。有名な諷刺劇『哲学者たち』によってディドロやルソーをやっつけたパリソーですらこれほどの酷評は与えられていないのだ。詳細にわたってのフレロン評には真偽のほどが疑わしい面も感じられるが、彼が当時のフィロゾーフたちからもっとも俗悪な存在とみなされていたことだけは確かである。

「恥知らずを粉砕せよ⁽⁸⁾」。

われわれはヴォルテールの名句集の冒頭に掲げられる「恥知らずを粉砕せよ」という文句が最初いかなる作品あるいは書簡の中でいかなる意味をこめて使用されたかを正確に決定することはできないが、そこに一つの条件を設けるならば、かなり納得のゆく証拠が提出できそうに思えるのである。すなわちヴォルテールとダランペールの往復書

(7) Oeuvres complètes de H. Rigault, éd. Hachette, 1859, t. 3, p. 148.

(8) 《Ecrasez l'infâme》

簡集 (1753—1778) の枠内で検討するという条件である。あえてこうした限定を設ける第一の理由はもちろんヴォルテールの全作品および書簡に眼を通すことが不可能であることであるが、第二の理由は次章で述べるようにヴォルテールがこの「恥知らずを粉砕せよ」の実現をもっとも強く期待したのが他ならぬダランベールにたいしてであることだ。ヴォルテールがダランベールに宛ててはじめてこの言葉を書いたのは 1760 年 6 月 23 日付の書簡である。

「……私は貴方が恥知らずを粉砕することを望みたい。それこそ重大な点です。彼らをイギリスにおけるような状態にひきもどすべきです、もし貴方が望むならば、やりとげられるでしょう。それは人類に捧げうる最大の奉仕であります」。

ここでは命令形にこそなっていないが意味はまったく同一である。一体この言葉はいかなる情勢の下で発せられたのであろうか。それは『百科全書』出版をめぐる反哲学者たちの攻撃が最高頂に達してきた時期なのである。この 10 年間にわたる攻撃の歴史をここで詳述することはできないが、1760 年の 5 月 10 日にはル・フラン・ド・ポンピニャンがアカデミー・フランセーズ入会演説において『百科全書』を公然と非難攻撃し、5 月 12 日にはバリソーの諷刺劇『哲学者たち』が初演され、所謂「哲学者の戦い」の幕が切って落とされたからである。こうした情勢下においてヴォルテールが「恥知らず」と呼んだ連中はいかなる面々であったか。ヴォルテールは上に引用した書簡につづく書簡 (1760 年 7 月 9 日) の中でダランベールにこう述べているのだ。

「私は半年前から嘲笑したくてたまりません、その気持は私からはなれたことがないのです。ゴーシャ、モロー、ショーメ、エイエ、トリュブレおよび彼らの共犯者たちについてなにか奇聞でもあったらお知らせくださいませか」。

ここでヴォルテールが列挙した連中はいずれもジェジュイットで『百科全書』出版当初からの攻撃家であったし、ヴォルテールの個人攻撃を頻繁にやってきた徒輩である。こうしてみると「恥知らずを粉

粹せよ」という言葉が生れた時期およびその対象をほぼ把握することができるのではなからうか。このヴォルテールの決意がどれほど堅いものであったかは、この文句が以後のダランベール宛書簡の中に執念深く繰り返えされている事実によって知ることができよう。まず 1761 年 4 月 20 日付の書簡ではこんな表現をとっているのである。

「……だが各人は自分のことしか考えず、恥知らずを撲滅するといふ第一の義務を忘れています。……お笑い下さい、そして私を愛して下さい。できるかぎり恥知らずを打倒しなさい」。

以上では「恥知らずを撲滅せよ」とか「恥知らずを打倒せよ」と書いているわけであるが、以下に示す日付のダランベール宛の書簡ではすべて「恥知らずを粉粹せよ」という表現に固定してくるのである。〔1762 年〕2 月 25 日、5 月 4 日、7 月 12 日、11 月 28 日、〔1763 年〕1 月 18 日、9 月 28 日、12 月 13 日、12 月 15 日、〔1764 年〕1 月 30 日、2 月 13 日、4 月 14 日、12 月 19 日、12 月 26 日、〔1765 年〕1 月 15 日、4 月 3 日、6 月 24 日。

これはジュールジュ・アヴネル監集『ヴォルテール全集』全 7 巻、1869 年版。第 6 巻に収められているヴォルテール・ダランベール往復書簡集の中から拾い出されたものである。（現在刊行中のスイスのベスターマン氏による『ヴォルテール書簡集』全 60 巻の予定、によれば多少の訂正をよぎなくされるかも知れないが。）これだけの数字をみてもヴォルテールがジェジュイットにたいしていただいた憎悪が並大抵のものでなかったことが分るのであろう。この点をより具体的に解明するための資料として以下の脚註⁽⁹⁾にヴォルテールの生涯を通じて彼と論戦した或いは対立した人々（一応、聖職者に限定してあるが、完全な形では政界あるいは社交界からさらに何名か追加すべきである）の名簿を作成しておいたから参照されたい。

(9) Bergier, Berthier, Bodoré, Briet, Bussier, Castel, Chaumeix, Coger, Desbillons, Dinouart, Fréron, Garnier, Gauchat, Geoffroy, Griffet, Guénée, Guyon, Hayer, Huet, Joannet, Laborde, Neuville, Nonnotte, Patouillet, Pézenas, Pérusseau Pompignan Simonet, Vinet.

そこで、「恥知らずを粉粹せよ」と叫びつづけるヴォルテール自身はその憎悪をどのような表現形式で世に訴えたかを、彼の一作品によって考察してみよう。それはつぎのように奇妙な題名を有するものだ。『イエズス会員ベルチエの病氣、懺悔、死亡、幽霊についての見聞記⁽¹⁰⁾』(1759)

作品の内容を述べる前にあらかじめつぎのことを知っておく必要がある。イエズス会員ベルチエとはディドロとわたり合ったジェジュイットの機関誌「ジュルナル・ド・トレヴー」の編集責任者として実在の人物であり、ヴォルテールのこの作品が発表された当時は大いに活躍中（実際に死んだのは 1782 年である）であったこと、またこの作品はバリ高等法院がジェジュイットの学院の閉鎖を命ずる 1762 年より 3 年も前に書かれたことである。まずこの 2 つの事実によって本作品の根本的性格が知られるであろう。

一般にヴォルテールの小説および小話^{ノヴェル}は 26 篇とされているが、この『ベルチエの死』は小説にも小話にもふくまれず、戯文^{フアセチ}のうちに数えられてきた。だがアメリカのフランス文学研究家ラップ氏はこれを『3 世紀間のコント集⁽¹¹⁾』の冒頭に置き、それについてつぎのようなコメントを附している。

「ギェスターヴ・ランソンは『イエズス会員ベルチエの死』をコントよりはむしろ戯文——気まぐれな喜劇的発想の枠内における独語、書簡、対話——と名づけようとしているが、これは 18 世紀におけるコントのすぐれて明快な論争手段の手本を示すに適しい性格描写と一貫した筋書を有するものであるから、われわれのコント集に加えるに値する」。

はたしてラップ氏の見解に組すべきかどうかは作品の大体の筋書（なるべく原文に沿った表現を用いた）をたどった上で検討することにす

(10) Relation de la maladie, de la confession, de la mort et de l'apparition du Jésuite Berthier, 1759.

(11) Contes diverses de trois siècles, edited by John C. Lapp, Boston, 1950.

る。

1759年10月12日、ベルチエはクチュを伴に連れて馬車でパリよりヴェルサイユへ向う。馬車の中には彼の保護者である宮廷人に届けるために『ジュルナル・ド・トレヴー』が積みこまれている。途中まで来るとベルチエが吐気を覚え、頭痛がして、しきりに欠呻が出はじめる。ベルチエ「どうしたんだろう、わしは欠呻をしたことはないのだが」、クチュ「神父様、それはお返しにすぎませんよ」、ベルチエ「なんだね、そのお返しとは」、クチュ「私も同じように欠呻が出ますもの、何故か分かりませんが」。2人はこんな会話を交しながら欠呻をつづける。これを見た御者までが欠呻をはじめた。この病魔は通行人にもうつり、沿道の家々の人も欠呻をはじめた。

そのうちにベルチエは冷汗が出てくる、クチュも同様、やがて2人は眠りこんでしまう。ヴェルサイユ宮殿の車寄せに着いても2人が目を覚まさないで御者は附近の人々に知らせる。丁度通りかかった宮廷の医者数人に診察を頼む。クチュの方はいくらか正気にもどったが、ベルチエはますます冷たくなってゆくばかり。はじめの医者は「わしは宮廷に入ってからもう医術には縁がなくてね」と言い残して立去ったが、2番目の医師は丹念に診た後「胆嚢をやられている」と述べ、3番目の医者は「脳が空っぽすぎるからだ」と断じ、最後に診た医者は「これは毒殺だ、しかも阿片や毒人蔘や菲沃斯の混合より猛毒だ、おい、御者、お前は薬剤師に頼まれた荷物でも積んでいないかね」と言った。御者は「いいえ、積んでおりません。ただ神父様の御言付けで小包がありますばかりで」と言いながら『ジュルナル・ド・トレヴー』を20部ばかり取り出した。すると医者は得意気に「どうだ、わしの眼に狂いはあるまい」と言った。居合せた人々は彼の素晴らしい診断に驚歎し、誰もが病気の原因をはっきりと認めた。そこで直ちに患者の眼前で小包は焼却された。ベルチエは少しもち直すのが、かなり病状は進んでしまっている。そこで名医は白葡萄酒に『百科全書』の一片をまぜて彼に飲ませることを思いついた。それをやってみると毒

気が沢山排出された。だがベルチエは呂律もまわらぬ状態から脱することができなかったので遂に懺悔をさせねばならなくなった。そこへ2人の僧侶が通りかかった。一方は「ジェジュイットの魂はゴツゴツしているから背負いこむのは御免です」と拒んだが、他方は「利用できるものはなんでも利用すべきです」と懺悔聴聞を引受ける。ベルチエはその僧に懺悔をする。そこへ元気になったクチュが飛んでくる。

「神父様、秘蹟を受けずに死んで下さい。今貴方と一緒に居るのは『聖職者週報⁽¹²⁾』（ジャンセニストの機関誌）の執筆者ですよ。これでは狐が狼に懺悔するようなものです。貴方が本当のことを申せば破滅です」。

驚愕と屈辱と苦悩と憤激によって一瞬生氣をとりもどしたベルチエは「懺悔を返せ」と毒づいたが後の祭り、遂に10月12日午後5時半永眠。

これにはさらにベルチエが幽霊となって登場してくる場面が加えられているが省略する。おそらくランソンをはじめ従来の文学史家がこれを戯文としたのは、実名人物の登場とあまりにも露骨な皮肉がロマンの限界を逸脱するものとみなされたからであろう。だがここに敢えてラップ氏を引き合いに出した理由は、ヴォルテールのロマンやコントに所謂純粹文学的粋をあてはめること自体が問題であるし、ラップ氏も指摘したように、この作品がもつ異常な迫力を雑文の中に葬り去ることが残念に思われるからである。もちろんそれだけの理由しかない以上、われわれはヴォルテールのロマンおよびコント集にこの1篇を新たに増補することを強いて主張することはなさそうであるが。

本論にもどるとして、この作品が主としてジェジュイットを攻撃目標としたことは自明であるが、見落してはならないのは最後のジャンセニストにたいする批判である。ヴォルテールはジェジュイットの没落をすではっきりと見抜いていたにちがいないのだ。だからこそ彼

(12) Nouvelles ecclésiastiques.

はジャンセニストの擡頭を一方では押える必要を感じていたのだ。こうした彼の微妙な立場はすでにジェジュイットの敗北が決定的となった時に高等法院の一員としてジェジュイット攻撃に専念してきたジャンセニストのショヴラン師に宛てた彼のパンフレットのうちにはっきりと示されている。

「フランスに再びルテリエのごとき人物が現れて組織をつくり、ローマの承認を得て信者たちを瞞し、司教を自分の控え間に呼びつけ、収監状を乱発するような事態が生じる時、その時には、貴方は大胆に筆を執り、貴方のすばらしい才能を存分に発揮なさることもできましょうが、現在は事態が突っているのです。わが友よ、追放がすべてではないのです。もっと慎重に構えなければなりません」。

或る面ではジャンセニストはジェジュイット以上に狂信的とも言えるし、ましてジェジュイットの敗北に乗じて何を仕出かすかも分らない、といった危惧がヴォルテールをして上のような発言をなさしめたのである。彼はジェジュイットもジャンセニストも本質的にフィロゾーフの敵であることを忘れなかったからである。彼が『平等均衡』という一文を草しているのもこの頃（1762）である。

「賢明な政府はわれわれが両者のいずれからも噛みつかれないように防いでくれるであろう。わが同胞よ、善良な市民、国王の良き臣下となろう。狂人やペテン師を避けよう。そして神のためにジャンセニストにもモリニストにもなるまい」。

何人にもまして坊主主義を憎みながらも現実的には健全な宗教の必要を認めるヴォルテールは当代のタルチュフの没落を見とどけるや反転して眼を大局に向けることを忘れなかったのだ。すなわち『平等均衡』という小論は、7年戦争によって疲弊したフランス国民の不幸を前にしてジェジュイットやジャンセニストの鬭争のみに心を奪われて国家の危急を忘れてはならぬと警告した愛国的論文であるからだ。執念深くジェジュイットを追撃しながらもジャンセニストの擡頭を制止し而も国家の運命に思い馳せるヴォルテールの存在が当時のフィロゾーフたちにとってどれほど貴重な指針となっていたであろうか。

ヴォルテールが『ベルチエの死』を書くにいたった直接の動機はジェジュイットの策謀による『百科全書』にたいする弾圧であるが、この『百科全書』と並んでジェジュイットから非難されたのがエルヴェシウスの『精神論』(1758)である。両書はすでにショーム師やゴージャ神父によって非難されたが、1759年1月3日、検事総長オメール・ジョリー・ド・フルーリによってパリ高等法院に告発され、同年2月8日には両書とも焼却処分¹に決定された。これほどの事件が起っているのにヴォルテールがエルヴェシウスの『精神論』に言及していないのは何故であろうか。それは無神論と快楽論によって異端の色彩があまりにも濃厚な『精神論』と並んで『百科全書』がまきぞえにされることを恐れたためであると言われる。だがエルヴェシウスの立場をさらに深く追究してみるならば今少しく複雑な理由が考えられるのである。エルヴェシウスはたしかに大胆な思想家であったにはちがいないが、宮廷の名医として貴族に列せられた父祖をもつエルヴェシウスは彼自身も若くして総徴税請負人の要職を与えられて巨万の富を貯え、その豪華なサロンにはフォントネルやピュッフォン等の名士を招いて語らうといったほどで、デイドロやダランペールとはかなり異った階層に属していたのである。しかも彼は『百科全書』に寄稿していないのである。ルソーとは異った立場ではあるがエルヴェシウスもまたフィロゾーフの中では孤立した存在であった。ヴォルテールのみならずデイドロ等もエルヴェシウスのうちに坊ちゃん気質の大胆さを認めて全幅の支持を与えることを躊躇した。したがってエルヴェシウスはジェジュイットから加えられた攻撃を独力で防ぐより他はなかった。そこで彼はヴォレの別邸にひきこもって『精神論』の続篇というべき『人間論』(1772)の執筆に専念したのである。

はるか後年に出版される『人間論』をここでとりあげる所以は、エルヴェシウスが『精神論』においてはジェジュイットと名ざして一言もふれてはいないのにジェジュイットから非難攻撃された憤懣を『人間論』の中で思う存分にぶちまけているからである。しかも『人間論』

は生前の出版を予定しなかったものであるだけにエルヴェシウスの心に去来したものはすべて率直に書きつけられているからだ。

「何故ジェジュイットは当時（『精神論』出版時）私にたいしてあれほど憤激して立上ったのか。何故彼らは大きな館において拙著『精神論』を非難し、それを読むことを禁じ、たえずカネー神父がドカンクール元帥に言ったように『閣下、エスプリはありませんかね、ありませんかね』とくりかえしたのであろうか。それは支配することだけに夢中であったジェジュイットがたえず民衆の盲目を望んだからである」。〔『人間論』第 16 章、原註〕

エルヴェシウスがヴォレにひきこもっている間にジェジュイットは崩壊してしまったからであろうか、つぎのような大胆ではあるが余裕のあるジェジュイット批判も見られるのである。

「ジェジュイットのために弁護しなければならぬ。ジャンセニストの攻撃は誤っている。ジェジュイットは決して放蕩ではない。その規律によって抑制され、快樂には無関心なジェジュイットはまったく野心のかたまりである。彼らの希望は、権力あるいは誘惑によってこの世の金持と要人を自分らに隷従させることである。貴人を意のままに使うように生れついている彼らの眼からみれば、そうした御偉方も身上相談や懺悔聴聞の糸によって動かされる操り人形なのである。彼らにたいする内心の軽蔑は外面の尊敬の下に掩い隠されている。御偉方はそれに満足しそれと気づかずにジェジュイットの操り人形と化しているのだ。ジェジュイットは誘惑によって行いえない事は力によって行う。歴史年代記をひもとくならば、この同じジェジュイットが支那、日本、エチオピアおよび平和の福音を説くあらゆる国々で誘惑のたいまつに火をともしが見出される。イギリスにおける彼らは議会を爆破しようと火薬を装填し、オランダではオレンジ公を暗殺させ、フランスではアンリ 4 世を暗殺し、ジュネヴァでは暴力革命の狼煙を与えたし、いくたびか細身の短剣をにぎった彼らの手もめったに快樂をつみとることはなかった、つまり、彼らの罪悪は墮落ではなく積極的な大罪を犯したという点にあることが分る」。〔同上〕

いささか逆説を弄しているように思える節もあるが、エルヴェシウスのジェジュイット攻撃はこのような暴露戦術によって展開されているのだ。彼はジェジュイットとフィロゾーフの闘争をヴォレの別邸から傍観しつつジェジュイットの悪業を書きつらねながら余生を送ったわけである。こうしたエルヴェシウスの態度も反ジェジュイット闘争における一つの特殊なタイプではなからうか。

〔III〕 ジェジュイットの追放をめぐる

ジェジュイットが自らの墓穴を掘りつづけた思想史上の沿革についてはすでに述べたが、彼らが社会的に追放されるにいたった原因は何であろうか。ここで注意すべきことはジェジュイットをめぐる紛争はフランスのみの現象ではなかったことである。そこでフランスのジェジュイット追放に先立って起ったポルトガルのそれについて考察しておこう。

死者3万を数えた1755年の有名なリスボン大地震はポルトガルに甚大な損害をもたらした。国王ヨゼフ1世は国力の回復を念願してセバスチアン・ヨゼフ・デ・カルヴァロー・エ・メルロ（後のポンバール公）に国政を委ねた。国家の秩序と繁栄を妨げる一切の障害を排除せんと決意したポンバール公は王家と宮廷に巢喰うジェジュイットの追放に乗り出したのである。1757年ジェジュイットは宮廷から追い出され、1758年には王国内における説教を禁ぜられた。そこに起ったのが同年9月3日に発覚したヨゼフ一世暗殺計画である。ポンバールがこのチャンスを見逃すはずはなかった。この陰謀に加担したという嫌疑によって10人のジェジュイットが逮捕され、うち3人が投獄された。1759年1月19日にはジェジュイットの神父たちは自宅に監禁され彼らの財産は没収された。同年9月17日には103人のジェジュイットが国外に追放されてリスボン港から出発した。彼らはいかなるポルトガルの領土に留ることも死刑を以て禁止された。権謀術数に長じていたポンバールはジェジュイットの追放によってローマとの紛争を惹き起すことを警戒してつぎのような手段を講じた。すな

わち陰謀に加担した嫌疑から投獄されていたマラグリダ神父が獄中で書いていた聖アンナおよびアンテクリストに関する二通の手稿を入手したポンバールはそれを宗教裁判所に提出して異端の烙印を押させることに成功したのである。マラグリダ神父は 1761 年 9 月 21 日未明に火刑に処せられた。ポンバールはかつてジェジュイットによって牛耳られてきた宗教審問所の権威を逆用して自らの勝利を誇示したのである⁽¹⁾。

フランスにおけるジェジュイット追放のきっかけとなったのは 1761 年に起ったラ・ヴァレット事件であった。イエズス会員ラ・ヴァレット神父は仏領マルチニク島に布教師として滞在するかわら同島の貿易事業を独占していたが、7 年戦争中に彼が所有した商船が英国海軍によって拿捕されるや、自ら破産を宣告してリヨンやマルセーユの商人たちに大きな損害を与えた。この一方的処置に憤激した商人たちはラ・ヴァレット神父をパリ高等法院に告訴した。高等法院はラ・ヴァレットを召喚して取調べた結果イエズス会の圧力をはねつけてラ・ヴァレットの敗訴を決定したのである。この事件を契機としてイエズス会の内幕が天下に暴露され、彼らの崩壊はもはや時間の問題となったのである。こうしたジェジュイットに決定的打撃を加えたのは 1762 年 4 月 1 日付のパリ高等法院によるジェジュイットの学院(ダニエル・モルネの研究資料⁽²⁾)によるとジェジュイット系学院はフランス全国で 113 存在した)の閉鎖命令である。この事件についてバショームンは同日付の『秘録』の所でつぎのように記している。

「これこそ文学共和国におけるもっとも輝かしき一転期である。高等法院の決定は本日執行され、ジェジュイットは直ちに彼らの学院を閉鎖した。ルイ・ル・グラン学院の在院者はすべて退去し、アルメニアンという名で知られた国王年金受領者たちは学院の隣りの新しい建

(1) La pensée européenne au 18^e siècle par P. Hazard, éd. Boivin, t. I, p. 140—141.

(2) Les origines intellectuelles de la Révolution française, par D. Mornet, 1954, éd. Armand Colin, p. 171.

物に移された。この日の事件について巷にはつぎのような諷刺文が流されていた。

聖イグナチウス劇団は来る水曜日 1762 年 3 月 31 日に最終公演としてデュブレン神父作五幕喜劇『イエズス会員アルルカン』並びにレネ神父作一幕喜劇『ロヨラの馬鹿話』を上演する。余興はポルトガル舞踊、さしあたっては『テミスの勝利⁽³⁾』。

当時はこんな戯歌も流行ったようである。

性悪仲間の、お主が命運なんと脆きことか。

お主を建てたが跛なら、お主を倒すは僂僕とくるよ⁽⁴⁾。

跛とはロヨラを指し、僂僕は前章でふれたジャンセニストのショヴラン師を指すのだそうである。

さらに 1763 年 7 月 24 日のパシヨームンの『秘録』によれば、つぎのようなジェジュイットの陰謀に関する文書が発見されている。

「ルイ・ル・グラン学院の図書館の書物の間から検事総長ダルジャンソン公の署名花押のある四折版の手稿が発見された。その中にはルイ 14 世の命を狙ったジェジュイットおよびパリ大司教デュ・アルレイによる陰謀の詳細が述べられている。この陰謀はブランシュ師によって暴露されたものであるが、それについて知れるところはつぎのとおりである。(以下省略)⁽⁵⁾」

これは密告したブランシュの供述に基いた文献であるから陰謀の真相についてはなお疑問の余地はあるとしても、ジェジュイットのやり口からすれば大いに有り得た事である。こうした事件が一片の供述書と共に闇から闇に葬られて不問に附せられていたという事実はジェジ

(3) Mémoires secrets de Bachaumont, éd. par Ad. Van Bever, Société des Editions, Louis-Michaud, t. I, p. 54.

(4) Que fragile est ton sort, Société perverse ! Un boiteux t'a fondé, un bossu te renverse !

(5) Ibid., t. I, p. 123—124.

ユイットと宮廷の恐るべき取引によるものと解する他はあるまい。それがこうして白日の下にさらされるいたってはイエズス会の権勢ももはや瓦解の一途を辿るより他なかった。かくして 1764 年 11 月 18 日、ルイ 15 世はイエズス会の解散を命じたのである。

ダランベール著『ジェジュイットの崩壊について』(1765)

本書はフィロゾフの反ジェジュイット闘争のいわば総決算ともいふべき著作である。すでに『百科全書』編纂のためにディドロと共にもっとも中核的役割を果たしてきたダランベールはジェジュイットをはじめジャンセニストからも攻撃され、ショワズール公のごとき宮廷人からも敵視されていたのである。(彼が『百科全書』編纂から途中で脱落したのは特に後者の圧迫に抗しかねたためだとされている。) こうした彼にたえず激励を惜まなかったのがフェルネーの長老ヴォルテールである。おそらくダランベールが『ジェジュイットの崩壊について』を執筆しようと思いついた動機には「恥知らずを粉砕せよ」と呼びかけつづけていたヴォルテールの期待に副わんとする気持が大きかったにちがいないのだ。

「ジェジュイットですら哲学と仲違いして以来もはや味方を失ってしまいました。現在彼らは高等法院の銜学者連と争っています。イエズス会が高等法院という階層を常識のない団体でであると考えているように、高等法院の方でもイエズス会は人間社会に反するものだと思います。だが哲学はイエズス会も高等法院も夫々言い分があると判断するでしょう」。(1761 年 7 月 9 日、ダランベールよりヴォルテールへ)

ここにはジェジュイットと高等法院の泥試合じみた争いを自信ありげに見下しているフィロゾフの立場がかなりはっきりとうかがわれる。またジェジュイットの敗北が決定的となった 1762 年にはダランベールはこう書き送っている。

「私はイエスの宗教がどうなって行くのか分かりませんが、イエズス

会は惨憺たる有様です。パスカルもニコールもアルノーも成し遂げえなかった事を 3・4 人の無智蒙昧な狂信者たちがやりとげたように思われます。わが国民は外部ではあのようにみじめな事しかやっていない時期に内部ではこんな強撃をやろうとしているのです。未来の年代記は 1762 年の項に『この年フランスはそのすべての植民地を喪失したが、ジュジュイットを追放した』と要約を書きこむことでありましょ。 (1762 年 3 月 31 日、ダランベールよりヴォルテールへ)

『ジュジュイットの崩壊について』の草稿が出来上ったのは 1764 年末のようである。それはまずヴォルテールの手許に届けられ、ヴォルテールの仲介でジュネーヴのガブリエル・クラメール書店で印刷に附された。ヴォルテールは草稿を読んでつぎのような最大級の讃辞を書き送っている。

「わが親愛なる哲学者よ、私は貴方が書いたと同じ速さで、また『田舎人への手紙』をはじめ読んで以来味ったことのない楽しみを以て、崩壊の歴史を読みました。私はパスカルにたいすると同様貴方にお尋ねしたい、貴方はこんな味気ない主題にどうしてこれほどの興趣を加えることができたのでしょうか、と。私はこれ以上賢明にして堅実な作品を知りません。貴方は狂信を葬る理性の司祭です。この狂信という怪物はヨーロッパのあらゆる善良な人々の家では息をひき取っています。それには生長はありません。ただ『キリスト教新聞』^{ジュルナル・クレチアン}や『聖職者週報』の執筆者たちの屋根裏部屋の中であわれな吐息をひびかせているにすぎません。神が貴方を祝福いたしますように。貴方はいと容易にモリストやジャンセニストを粉砕しております。貴方は国家を乱した二陣営をひとしく軽蔑させることによって国家の幸福をつくったのです。2 日後には印刷にかかるでしょう。クラメールは直ちに貴方の許に貴方が御存知のものをお送りするでしょう」。 (1764 年 12 月 26 日、ヴォルテールよりダランベールへ)

はたしてヴォルテールが賞讃するようにこの作品はパスカルの名作『田舎人の手紙』に比肩しうるであろうか。それはいささか賞め過ぎと言わねばならないが、ダランベール自身もこの作品については大分

自信があったようである。

「私は、この作品が一般的立場にとって有益であろうし、私のあらゆる見せかけの尊敬を以てしても彼らはやはり心良く思わないであろう、と信じています」。 (1765年1月3日、ダランベールよりヴォルテールへ)

1765年に初版を世に問うた『ジェジュイットの崩壊について』は哲学者陣営からの告発者ヴォルテールや検事ディドロの論告を経てジェジュイットに下された最終判決とも称すべきものであった。そこにはパスカルの劇的な論法の迫力こそないが明快な分析の魅力が見出られるのである。

ダランベールはまず型通りの献辞（某高等法院判事に捧げると題して）と前書の後に本論に入り、聖処女マリヤのドンキホーテと自ら信じたロヨラの改心から説きはじめ、イエズス会設立の利害をオランダの堤防のそれに比較し、ジェジュイットの教育や文芸にたいする歴史的功績を認め、イエズス会と大学の対立、ジェジュイットとジャンセニストの血醒い抗争、ウニゲニトゥス回勅をめぐる論争およびルイ14世の死去によるジェジュイットの後退、哲学者たちとの闘争、ラ・ヴァレット事件の敗訴をきっかけとするジェジュイットの決定的敗北にまで論及しているのである。ダランベールは3世紀にわたるジェジュイットの歩みの中から彼らの盛衰にかかわるような事件はなに一つ見逃すまいとしているが、歴史家としてよりは哲学者としてそれらの事件をながめているのである。

「この残忍過酷なジェジュイット（ルイ14世の最後の懺悔聴聞儒ル・テリエ・訳者）の最後の手柄はポール・ロワイヤルの破壊であった。ここでは石塊一かけらも残されなかったばかりか、葬られていた死骸までも暴き出されたのである。そこに住んでいた著名な人々ゆえに尊敬さるべき館、憎悪よりは共感に値する気の毒な宗教家たちにたいする、この上なき残忍さを以て遂行された暴行は、全王国に抗議の叫びをひきおこし、それは今日にいたるまで鳴りひびいているのだ。……だがポール・ロワイヤルの破壊がよびおこしたジェジュイットへの憤激も

ウニゲニトゥス回勅が惹起した万人の激昂に比するならば物のかずではなかった⁽⁶⁾」。

おそらく一般の歴史家あるいは文学者であるならばこのポール・ロワイヤル寺院破壊の戦慄すべき光景により多くの言葉をついやしたであろうし、そこにジェジュイット崩壊の兆候を見出したであろうが、哲学者ダランベールはウニゲニトゥス回勅こそジェジュイット滅亡の第一原因であるとみなしたのである。

「この回勅とそれが原因となった迫害こそ 50 年後のジェジュイットに致命的打撃をもたらしたのである⁽⁷⁾」。

彼はここできわめて注目すべき指摘を行っている。すなわち当時の識者たちはウニゲニトゥス回勅によって指弾された 101 条にのぼるケネル神父の文章の中でも特に第 91 条にたいする非難をもっとも不当なものともみなしたということである。その第 91 条にあげられたケネル神父の文章はウニゲニトゥス回勅の原典によれば以下のとおりである。

「不当な破門への恐怖はわれわれが義務を果たすことを決して妨げるものではない。人は、邪悪な人間によって追放されようとも、神の恵みによって神およびイエス・キリストと教会そのものに結びついているならば、決して教会からはなれるものではない⁽⁸⁾」。

バリ高等法院は最初こうした理不尽なクレメンス 11 世の禁令の発効を認めることをためらっていたが、ルイ 14 世直接のお声がかりとあつては屈服するより他はなかった。したがってダランベールはルイ 14 世の死去をジャンセニストおよびフィロゾーフにとって幸運な事件とみなしている。ここに登場してくるフィロゾーフの中でもヴォルテールの活躍が数頁にわたって述べられているのはあながち先輩にたいする敬意とばかりは言えないであろう。

(6) Sur la destruction des jésuites, par D'Alembert, 1765, p. 96—97.

(7) Ibid., p. 100.

(8) Cf. La querelle de l'Unigenitus, par J.-F. Thomas, P. U. F., 1950.

さらにダランペールは反ジェジュイット闘争を勝利に導いた原因が何であるかについてつぎのような見解を示している。

「フランスにあって国民のなしうることは、彼らを支配する人々に向って、たとえ間違いであろうと正当であろうと、賛否を問わず、自己の意見を述べることである。この事件において国民の声がなんらかの役割を果たしたことを認めねばなるまい⁽⁹⁾」。

「司法官たちの弁舌を介してジェジュイットにたいする判決をもたらしたのはまさしく哲学である。ジャンセニズムはただその引立役にすぎなかったのだ。国民および彼らの先頭に立った哲学者たちがこうした神父の絶滅を望んだのである⁽¹⁰⁾」。

ダランペールはこのようにジェジュイットの敗北は理性の勝利であると断言するが、それは宗教家にたいする哲学者の完全な勝利を意味するものでないことを忘れなかった。これはヴォルテールの見解とまったく同一である。

「気のおけぬ人間でもあったジェジュイットは、人々が彼らの敵として名乗り出ないかぎり、人々の好むままに考えることを許すが、理性もなければ容赦もしないジャンセニストは自分たちと同じように人々も考えることを望むのである⁽¹¹⁾」。

「ジェジュイットの狂信を禁じた司法官たちはもう一方の狂信がそれにつづくのを黙認するにはあまりにも賢明であり愛国的であり世紀の水準を超えていた。すでに司法官の一部の人々（たとえばラ・シャロtte氏のごとき）はジャンセニストにたいする憤満をはっきりと表明しているし、彼らから哲学者の列に加えられるという名誉を獲得しているほどである⁽¹²⁾」。

かくしてダランペールはジャンセニスト攻撃を準備する。

「したがって宗教と国家の名誉にとって残された仕事は両派を平等

(9) Op. cit., p. 191.

(10) Ibid., p. 192.

(11) Ibid., p. 203.

(12) Ibid., p. 205.

に抑圧し低落せしめることだけである⁽¹³⁾。

ダランベールは初稿において十分に論及しえなかったジャンセニストの問題を取り上げるために直ちに加筆しなければならなかったのである。

「私は『ジェジュイットの崩壊について』に追補を加えました。ここではわれわれに残されている唯一の敵ジャンセニストが当然そうされるにふさわしい仕方でありあつかわれています」。(1765年11月22日、ダランベールよりヴォルテールへ)

ここまで論じつくすならば先輩ヴォルテールも両手をあげて彼の労をねぎらって然るべきところであるが、フェルネーの長老はなおこんな注文をつけているのだ。

「今日のフランスではむしろ憐憫に値するこれらの哀れな悪魔供ジェジュイットが出すべき誓約についての最後の章は無用ですから削除してイスパニヤに関して何か付け加えるつもりはありませんか」。

(1767年5月3日、ヴォルテールよりダランベールへ)

ダランベールはこの長老の注文には応じていないが、イスパニヤに関するヴォルテールの着眼はたしかに注目に値するものであった。なぜならば、イスパニヤにおけるジェジュイットの追放は1767年5月に行なわれており、上のヴォルテールの書簡と同年同月の出来事であり、それがヴォルテールの早耳によるか偶然の一致によるかは問題外としても、そこにいたるまでのイスパニヤの反ジェジュイット闘争がフランスにとって無縁であったはずはないからだ。実際、イスパニヤにおけるジェジュイット追放の立役者であったアランダ伯はフランスのフィロゾーフから少からず影響を受けた人物であったと伝えられている。したがってヴォルテールの注文も一考に値するものであったのだ。

また反面では「これは無用であるから削除してはどうか」とヴォルテールが忠告している最後の章とは一体いかなるものであったか、ま

(13) Ibid., p. 214.

たはたして削除すべき性質のものであったか、という問題も出てくる。それはジェジュイットにたいする 27 条にのぼる質問状であり、それについてダランベールは「高等法院の判決文の余白に書きこまれていたものと思われる」と擬制的註釋を施しているが、実際はジェジュイットにたいするフィロゾーフの駄目押し的な詰問状に他ならないのだ。ヴォルテールにしてみれば、すでに落目のジェジュイットをこれ以上深追いすることは無益であるばかりでなくジャンセニストとの関係において危険であるとさえ感じられたのであろう。だが次章で述べるようにヴォルテールの見解はいささか甘すぎたようである。ダランベールが敢えて駄目押しをしたのにもかかわらずジェジュイットの息の根をとめることはできなかったのである。なるほどジェジュイットは一応高等法院の判決に服従してイエズス会から離脱したが、彼らは決してフィロゾーフに屈服したと信じてはいなかったし、また高等法院もそこまでは望まなかったのだ。したがってダランベールがひそかに危惧したであろうように「ジェジュイットの崩壊」は看板通りには行かなかったのである。むしろ一方に頭を下げただけに一層つよく他方に噛みつく結果になったのだ。であるから問題の最後の章についても素通りは許されない。ダランベールの前書はこうだ。

「われわれはジェジュイットに要求された誓約について以上で言及した質問状をここに附して本作品を終りたい。これらの質問状は各質問にたいしてなすべき返答従って神父のとるべき決意について疑いの余地なきような形で提出されている。この問題についてジャンセニストおよびジェジュイットによって発表された作品の中では質問の真意から身を外らそうとつとめている風がみえる。だがこの筆者は両陣営から出版された無用な美辞麗句の代りにいささかの論理を置こうと望んだようである。それは弁護人や回勅の修辭にかかっては際限もあるまい多くの論点を要約するための秘訣である⁽¹⁴⁾」。

参考までに質問の第 1 条を引用しておこう。

(14) Ibid., p. 220.

「国王あるいは彼を代表する司法官たちは一つの宗教団体が国家の法律に合致するか否かを決定する権限をもつ審判者ではなかろうか」。

フリードリッヒとエカテリーナ。

まずポルトガルついでフランスおよびイスパニヤから追放されたジェジュイットは一体何処に亡命したのであろうか。彼らの多くがローマに赴いたことは当然であるとしても、彼らの一部がプロシヤとロシヤに迎えられたことは奇異な感を与えられよう。なぜならば、フリードリッヒ 2 世とエカテリーナ 2 世はいずれもフランスのフィロゾフの友として啓蒙君主の名声を誇っていたからだ。まずフリードリッヒについてみるならば、1770 年に彼と会見したリーニュ公（オランダの名門の出身でオーストリア軍の司令官として 7 年戦争で活躍し後に元帥となるが、ヴェルサイユ生れかと思われるほどのフランス語の達人であり、各国を歴訪して知友に富んだ社交家でもあった）の書簡の中に引用されているフリードリッヒの言葉は興味深いものである。

「ローマとアテネの優美の受託者であり人文学そしておそらくは人類愛のすぐれた教授であるもある前神父たち（ジェジュイット、訳者）を人々は何故根絶したのででしょうか。教育の破滅でしように。きわめてキリスト教徒的であり信心深く使徒的なカトリック国王である私の兄弟たちが彼らを追い出したので、きわめて異教徒的な私はできるだけ彼らを拾い集めています。いずれ人々は彼らを獲得するために私に御追従を言うようになりましょう。私は種族を保存しておくのです。先日私も彼らに申しました、神父さん、貴方のような修道院長は 300 エキュで大いに売れますよ、また管区長の神父さん、貴方は 600 エキュですな、と。こんな調子で他の連中もそれ相応に売れますよ。金のない時には投機をやるものですよ⁽¹⁵⁾」。

(15) Choix de lettres du 18^e siècle, publié par G. Lanson, Hachette, p. 549.

イスパニヤのカルロス3世は宰相フロリダ・ブランカをして法皇ピオ6世にフリードリッヒの行為を非難させた。ピオ6世はカルロスとフリードリッヒの間にはさまって解決に苦慮した（或いは苦慮したように見せかけた）が、結局、フリードリッヒがプロシヤに亡命してきたジェジュイットの正服を交えるという条件によって事は納められた。お互いに腹に一物も二物もある国王や法皇の間ではこんな猿芝居が打てたが、肝心のフィロゾーフが納まるはずはなかった。フリードリッヒはダランベールに宛ててつぎのような弁明を行っているのだ。

「私はジェジュイットが強力であった間は彼らを決して保護しませんでした。不幸な現在の彼らのうちに私が見出しているのは青年の教育にとってきわめてかけ替えの困難な文人たちだけです。私が彼らを必要とするのはこの貴重な目的からです、と申しますのも、國中のあらゆるカトリック僧の中でも文学に専念しているのは彼らだけなのです、ですから誰が何と言っても私から一人のジェジュイットも取り上げることはできないでしょう⁽¹⁶⁾」。

これがフリードリッヒの本心であるはずはなかった。おそらく彼は新たに征服したシレジヤ地方のカトリックたちを慰撫し又ポーランドへの野心を実現するためにジェジュイットの手腕を用いようとしたにちがいないのだ。もちろんダランベールはフリードリッヒの弁解を信ずることはできなかった。

「私が陛下のために危惧いたしますのはパリ高等法院がそう呼んだところの前自称ジェジュイットの再建ではございません。実際、オーストリア軍、皇帝軍、フランス軍、スエーデン軍が連合してもただ一つの部落すら奪うことのできなかった国王にたいして彼らがどんな害を与えることができましょう。だが陛下、私が危惧いたしますのは、陛下のように全ヨーロッパに対抗できないような他の君主たちがこの毒人蔭を彼らの畑から抜き取ってはいますが将来再び陛下から種子を

(16) Histoire de la chute des Jésuites au 18^e siècle, par Le Comte Alexis de Saint-Priest, Paris, Librairie d'Amyot, 1846, p. 225.

借りて彼らの畑に蒔く気になりはしないかということです。私は陛下が御国だけに役立つジェジュイットの種子の輸出を永久に禁ずる勅令をお出しになるよう切望いたします⁽¹⁷⁾。

この控え目なダランベールの要請にたいするフリードリッヒの返答は、他人に種子を譲るには自分はジェジュイットの保存にあまりにも執念であると嘯き、「そのような憎悪は真の賢者の心には決して入ってこないでしょう」と決めつけた。ダランベールは憤激した。しかし貧困のどん底にあった彼を援助してくれたことのあるフリードリッヒに真向から楯つくことはできなかった。こんな場合せめてヴォルテールの助力でも仰ぐことができればというのがダランベールの願いであったのだ。

「貴方は現在私が何のために苦しんでいるか御存知ですか。貴方の年来のお弟子が最近の戦争中に経験したと彼自ら私に述べたところの不実不信にかんがみて厄介払いしようと極力望んでいるジェジュイットのゴロツキたちをシレジャから追い出すためです。私はベルリンに出す手紙にはかならずこう申しそえます、フランスのフィロゾーフはフィロゾーフの王者がフランスやポルトガルの国王の真似をするのにこんなに長く手間どっているのに驚いている、と。これらの手紙は、貴方も御承知のように、真実の信者が彼について考えることにはきわめて敏感な国王に読まれるのです。おそらくこの種子は神の恩寵によって聖書にいみじくも述べられているように蛇口のように国王の心を回転させる効果を産み出すでしょう⁽¹⁸⁾。

だが前述したようにジェジュイットの深追いは得策でないと信じていたヴォルテールはダランベールの巧妙な勧誘に乗ろうとはしなかった。したがってヴォルテールからは月並な慰めしか得ることはできなかった。

「フリードリッヒがもつ偏見は許してやるべきです。人は無償で国

(17) Ibid., p. 227, D'Alembert à Frédéric, 24 avril 1774.

(18) Ibid., p. 228, D'Alembert à Voltaire, 15 déc. 1773.

王となるわけではありません。国王や神はあるがままた考えるべきです⁽¹⁹⁾」。

しかしフリードリッヒがジェジュイットに保護を与えたという事実は 18 世紀のモラルに革期的な変化をもたらした、すなわち、それまでは啓蒙の美名の下にかくされていたフィロゾーフと君主たちとの超えがたき溝が白日の下に曝き出されたのである。

エカテリーナの場合も大同小異と言えるが、彼女はフリードリッヒのように投機的立場からではなく当面の施政の見地からジェジュイットを迎え入れたのである。元ポーランドの領土であった白ロシアの統治にジェジュイットの協力を利用しただけである。それは単純に政治的であったが故に却って禍根の危険は少かった。またエカテリーナはフリードリッヒのようにムキになってフィロゾーフを敵に廻す気持はもち合せなかった。それだけ彼女の方が役者が一枚上であったとも言えよう。ともかく白ロシアの片隅にジェジュイットの苗床がピオ7世によるイエズス会の復活 (1814) まで存続したことだけはたしかである。

〔IV〕 反百科全書派の反撃

学院の閉鎖について会の解散を命ぜられたジェジュイットが社会的に蒙った打撃は決定的であるが、追放をまぬかれて国内に留った多数の旧ジェジュイットの思想的活動はフィロゾーフが予想したように決して低調にはならなかった。それはまずガブリエル・ゴージャ師の『批判的書簡、宗教に反対する近代の各種著作の分析と反駁⁽¹⁾』全 19 巻の完結 (1763) において示されよう。本書は 1755 年より発表されつづけてきたのであるから従来の反フィロゾーフ運動の総決算とも言ううるし、新たな攻撃の基盤をなすものでもあった。その各巻の表題を見て行くなれば、当時の反哲学者グループが誰を敵視し何を問題とし

(19) Ibid., p. 229, Voltaire à d'Alembert, 11 juin 1776.

(1) Abbé Gauchat: Lettres critiques, ou analyse et réfutation de divers écrits contre la religion, Paris. C. Hérisant, 1755—1763.

たかが明瞭である。(原典の購入ができなかったのでパリ国立図書館の目録による。)

(1) 『哲学書簡』、『哲学的思索』、『風俗史』、ポーブの詩『人間論』について。

(2) 『ベルシヤ人の手紙』、『トルコ人の手紙』、『ユダヤ人の手紙』、『神秘の手紙』、『シナ人の手紙』、について。

(3) 『ラ・アンリアード』、鍛帳芝居、悲劇の各種主題、『マホメット』という悲劇について。

(4) 『世界史』、自然宗教についての詩、『ルイ 14 世の世紀の歴史』、オルレアンの処女についての詩、似而非学者たちの無信仰、『法の精神』という書物の用徒について。

(5) 『法の精神』、『法の精神』の弁護、『法の精神』の分析、人間の不平等に関するルソー氏の論説、ベイルの分析について。

(6) 続ベイル分析、エピクロス、古代と近代の哲学者たち、信仰に通ずる道、恩寵と自由、神聖なる戦争、教会の儀式、科学と信仰の対立、マネス教について。

(7) 続々ベイル分析完結、摂理、神の定義、マホメット教、歴史、賢者のピルロニスムについて。

(8) 良識についての伴りの哲学、『人間の友』に発表され近代わが国の哲学者とりわけ『法の精神』と対立する真実の哲学について。

(9) 続『人間の友』

(10) 確実性の原理について。

(11) 不明。

(12) 『精神論』、無神論、ピルロニスム、寛容主義、哲学的自由、逆説、矛盾について、附録、各節に分けられた教理問答。

(13) 哲学的寛容、キリスト教的不寛容、プロテスタント的寛容について。

(14) 真理の保護、誤謬の市民的寛容、追放、誤謬の処罰、誤謬の保護、真理の迫害について。

- (15) 寛容, 世界の起源について.
- (16) 怪物『自然の法典』, 立法, 真実の自然の法典, 自然的啓示的
法則の類似, 自然の真実の法について.
- (17) 本質的宗教, 信仰, 啓示, 神秘, 神の善意と審判, 祭式について.
- (18) 未来の生活, 魂の存在と本性と不滅, 予知と自由, 哲学と思想の自由について.
- (19) 『新エロイーズ』, 『エミール, 教育』について.

以上で問題とされている思想家たちの名前を巻を追って列挙するならば、ヴォルテール、ディドロ、モンテスキュー、ダルジャン、ベイール、エルヴェシウス、モレリ、ルソーとなる。この年代からすれば前後倒錯の甚だしい配列は本書が歴史的立場からではなく問題論的立場から書かれたことを証明する。これらの表題を通観して特に注目されることはゴーシャ師が公然と反哲学者の立場をとりつつも反面では反哲学的とみなされぬよう配慮していることである。それが彼個人の一贯した論法であることは彼の後年の作品『キリスト教と理性の一致⁽²⁾』(1768)によって明らかである。これを一般的にみるならば、哲学や理性という名分はもはや反動的思想家にとっても敵にまわすことのできないものとなってしまったということである。したがって今や彼らの攻撃目的はフィロゾーフの手から理性という錦旗を奪取することとなった。そのために彼らは哲学を賞揚しつつ哲学者を非難するという冒険に敢えて挑まなければならないのだ。こうして旧ジェジュイットを中核とする反哲学者陣営は宮廷や上流階層の反動化に乗じて体制の挽回に努めはじめた。彼らがフィロゾーフに加えた執拗な反撃の中からはつぎのような奇怪な作品も生れ出たのである。

『反哲学辞典, 哲学辞典および今日キリスト教に反対して現れた他

(2) Abbé Gauchat: Accord du Christianisme et de la raison, Paris, C. Hérisant, 1768.

の書物にたいする註釈と訂正に役立つために⁽³⁾』(1767)

まず題名についてであるが、ゴーシャ流の論法を以てすれば当然『反哲学者辞典』と銘打つべきであったろうし、実際内容もそう名づけられるに適しいものであるが、副題に示されているように本書はヴォルテールの『哲学辞典』を主要な攻撃対象としているが故に『反哲学辞典』と題されているのだ。

だが本辞典の作者(編者と言った方が妥当かも知れないが)は誰であろうか。もちろん無名出版である。われわれが本辞典の存在にはじめて気づいたのはヴォルテールの敵対者の一人であるコジュ師の著作目録の中からである。しかも上に紹介した初版本(パリ国立図書館所蔵)の表扉の中段に何人かの肉筆で「コジュ師著とされている⁽⁴⁾」と書き込みがなされているのだ。したがって一般にこれはコジュ師著とみなされていたにちがいないのである。それならそれで問題とするにあたらなわけであるが、われわれは或る必要からショードン師の著作目録を検討している時にやはり本辞典がショードン師著として挙げられていることを知ったのだ。いかなる理由から本辞典がショードン師著とされているのか推察することは困難であるが、おそらくはショードン師が『携帯用新歴史辞典⁽⁵⁾』(1766)および『偉人たちの復讐、多くの著名人にたいしてヴォルテール氏その他の哲学者によってなされた判断の吟味⁽⁶⁾』(1769)の二作品の共同執筆者となっているからであろう。それらがいずれもヴォルテールの著書にたいする反駁であり辞典の体

(3) Dictionnaire anti-philosophique, pour servir de commentaire et de correctif au Dictionnaire philosophique, et aux autres livres qui ont paru de nos jours contre le christianisme, Avignon, chez la Veuve Girard et François Seguin, à la Place Saint-Didier, 1767.

(4) 《attribué à M. l'abbé Coger.》

(5) Abbé Chaudon: Nouveau dictionnaire historique portatif, Amsterdam, M.-M. Rey, 1766.

(6) Abbé Chaudon: Les grands hommes vengés, ou Examen des jugements portés par M. de V et par quelques autres philosophes, Amsterdam, et Lyon, J. M. Barret, 1769.

裁をもっている関係からしてショーンドン師を『反哲学辞典』の作者とする根拠が生れてくるように思われる。もっともショーンドン師の場合は上記の二作が共同執筆と明示されているから『反哲学辞典』についても同様なことが推定される。ところが問題をさらに混乱させるのは、やはりヴォルテールの論敵の一人であったノノットを本辞典の著者とする記録が存在するのである。すなわちパリ国立図書館のカタログはコジュ、ショーンドン、ノノットの三者をひとしく『反哲学辞典』の著者としているのである。何故こうした矛盾が今日まで許されてきているのかは 18 世紀研究の一つの盲点を示すものであろうが、この問題をこれ以上追究する資料を現在われわれは見出すことができない。したがって『反哲学辞典』の著者あるいは編者を誰某と断定することはきわめて困難であるが、幸いにして、誰等の協力で作られたかを判定することだけは本辞典の序文によって容易なのである。

「ペルチエ、ジョアネ、ゴーシャ、ル・フランソワ、トリュブレの諸氏は多くの論説をわれわれに提供してくれた。われわれはそれらを雑誌や書物に載せられているままなら変更を加えずここに発表したのである⁽⁷⁾」。

ここに名を挙げられている人々は旧ジェジュイットのうちでも屈強のアンチ・フィロゾーフである。したがって本辞典は編者が誰であるにせよ実質的には旧ジェジュイットの共同作品であるのだ。また本書が編集された直接の動機は『序文』の冒頭にはっきり述べられている。

「辞典の中に誤謬が入れられたからにはそこに真理を入れかえることが必要である。無信仰の使徒たちは彼らの毒物をまき散らすためにあらゆる種類の形をとる。したがって宗教の擁護者たちもその治療薬を人々に飲ませる手段を求めないでよかろうか。アルファベット方式は今日の趣味であるから、読者を獲得するためにはその方式に従う必要が大いにある。

無宗教の狂熱がこの世に投じたあらゆる作品のうちでも『哲学辞

(7) Dictionnaire anti-philosophique, Préface, p. xij.

典』以上に腹黒い筆法が目立つものはおそらくないであろう。すべての力がこの憎むべき作品にたいして武装した、黙っていは義務を怠ることになったからだ⁽⁸⁾。

こう述べてもヴォルテールの『哲学辞典』だけが攻撃されているわけではない。それは『序文』の最後でこう述べているとおりである。

「われわれがヴォルテール氏について言ったことは本書でも問題となる他の無信仰者たちについて言えることである。彼らの多くは普通の人間であるから憐憫に値するが、彼らのうちの何人かは偉大な人間である。しかしその人々にも手心と手控を加えてやらねばならぬ。暴力や傲慢や軽侮の精神はすべてわれわれから去れ、火刑と絞首台しか語らぬ残忍な熱情はわれわれから去れ。狂熱と復讐の思いを少しでも鼓吹するよりは私のすべての著作が永久に滅びるように。聖書と理性こそキリスト教の守護者の唯一の劔となるべきである⁽⁹⁾。

語るに堕ちたとはこのことである。彼らがフィロゾーフに怠っていた憎悪と復讐の思いは吾人の想像以上と言うべきであろう。また本書が『反哲学辞典』よりは『反哲学者辞典』と称せられるべき所以は、ベイル、ディドロ、エルヴェシウス、ラ・メトリー、プラード、ルソー、トランド、ヴォルテール⁽¹⁰⁾にそれぞれ個人項目を設けていることによっても明瞭である。

たしかに本辞典の意図する所はフィロゾーフの立場からすれば破廉恥きわまりなき反動であろうが、第三者の立場からすれば果してそれだけのものにすぎなかったと言い切れるであろうか。もはやフィロゾーフによって戯画化されたままに彼らの反対派をながめているだけではフランス啓蒙思潮研究はますます公式論に陥るだけである。吾人の正当な偏見をより真実に立脚させるためにも、フィロゾーフに劣らぬ

(8) Ibid., p. v.

(9) Ibid., p. xiv.

(10) Bayle (p. 39—43), Diderot (p. 94—96), Helvétius (p. 132—133), La Mettrie (p. 210—215), Prades (p. 255—256), Rousseau (p. 300—302), Toland (p. 335—349), Voltaire (p. 367—372).

智識と表現力を備えた反対派の言い分に耳をかたむける必要がある。

「狂信。(それは無宗教よりも美德を産むものである)近代の哲学者たちは狂信にたいして大いに反抗しているが、たしかに彼らにも一理はある。しかしそれは血醒く残忍であっても強大な情熱である。それは人間の心を昂揚し、死を軽蔑させ、異常な活動力を与えるものだ。そこからもっとも高邁な美德を引き出すためにはそれを正しく導きさえすればよいのだ。だが一般に理性的哲学的精神は生に執着し、魂を柔弱にさせ墮落させ、あらゆる情熱を低俗な個人の利害や卑俗な人間の自我に集中させ、あらゆる社会の真実の基盤を除々に掘りくずしてゆくのである。なぜならば、個人的利害において共通するものはきわめて僅少であるから対立は決して均衡しないであろうから。無神論が血を流すことができないのは平和にたいする愛好よりは善にたいする無関心からである。所謂賢者は自分さえ書齋に落ち着いておられるならば一切はどうなろうと成り行きに任せて問題にしないのだ。彼の原理は人間を殺すことではなく、人が生れることを妨げ、人間を増加させる風習を壊し、人間を種から切りはなし、美德や繁殖に有害な内密のエゴイズムに人間の感情を導くことである。哲学的無関心は専制下における国家の平穩に類するものであり、死の平穩である。それは戦争そのもの以上に破壊的である⁽¹¹⁾」。

ここに展開されている情熱論がきわめて危険な方向を目指すものであることは言を俟たないが、それなりの洞察と理窟はフィロゾーフの正論を以てしても簡単に打破しえたはずはない。そこには論争によっては解決されようもない両者の根源的な対立感情が存在したからである。だが第三者の立場に甘えて反哲学者陣の巧妙な弁舌に秘められた底意を見逃すことは許されない。

「思想の自由。(いかなる限界をそこに与えるべきか。)思想の自由は人間の特権である。人間の意見は彼の精神に依存する。何人もそれを妨げる権利をもたない。だが今世紀の哲学者たちはこの特権にきわ

(11) Ibid., p. 118—119.

めて広い意味を与えている。それによって彼らは人間のいかなる権威からも圧迫されずにどんな大胆な意見でも天下に発表しうる自由と考えているのだ。それは有害であると同時に間違った原理でもある。人間は彼の精神の働きと彼の心情の動きの支配者ではあるが、彼自身それに合致すべき不動の規則を有する。真理こそ人間の精神の規則であり、神の掟こそ人間の心情の規則である。もし彼が意志によってその規則から逸脱するならば、彼は罪人となる。もしその逸脱が彼の心のうちのみ考えられるならば、彼は神にのみ責任をもつ。人間は純粹に内面的な事柄を審判し改革することはできない。だが一人の大胆な天才が誤った意見を自分でもっていることだけでは満足できず彼の誤謬を他人にまでひろげようと望むならば、正統な権威は彼を罰する権利がある。したがって罰せられずに真理を攻撃し罪悪と誤謬の教えを弁じたてる特権を学者たちにどうして与えることができようか。おお、いまわしき自由よ！ それを抑制するためにはどんな法律を作っても厳しすぎることはないのだ⁽¹²⁾。

反動家の正体が真理の名において彼ら自身の口から曝き出されているのだ。このフィロゾフ一般にたいする攻撃が個人に向けられた場合はどのような表現をとったであろうか。それを「ディドロ」の項で代表させてみよう。

「ディドロ。(この作家と作品の性格) 人々はこの聖書を引裂く作家をボワローが征服者を非難した頁を切り捨てようと欲したシャルル12世に較べている。この比較には真実がある。ディドロ氏はスウェーデンの国王が名誉にたいしてそうであったように熱狂的に宗教に反対している。この宗教の残忍な敵は仮綴本や猥小説の中で準備をととのえた、というのは、近代の哲学者たちはそうした書物の中で彼らの公教要理を教え弁じているからだ。しかし彼は『哲学的思索』によって大きな打撃をもたらし、それによって投獄されたのである。或る著名なジャーナリストがこの作品を『哲学的書簡』と比較対照したが、

(12) Ibid., p. 178—179.

実際、これら二つの書物は表題においてほとんど相異がなく著者たちの目的においてはさらに違いが少いのだ。……

前述したように、この作家は宗教についてはなにも見えないし聞かえないのだ。それは彼の『盲人書簡』について或る批評家が下した判断の引用によって容易に証明できよう。その批評家の言によれば、著者はそこで野獣を理性的被造物に格上げし、われわれと同列に置いたのだ。彼は理性の根源がわれわれの器官と同様に変化すると巧妙に述べることによって理性そのものを否定しようと図っている。彼は所謂小心者から憎まれている犬儒的破廉恥は人間を不都合千万な偏見から解放するところの崇高な哲学の勇敢な努力であるとまで暴言を吐いているのだ。そこでは美德の目録から人類愛や同情心が抹殺され、われわれの美德は器官や感覚の相異に応じて変化すべき機械的性向や盲目的感情に還元されると述べられている。誤った観念、誤った推理、狂気じみた逆説、根も葉もない煩論、これらすべてが以上の憎むべき原理を支えるために巧みに利用されている。著者は盲人たちを哲学者に見立てて彼ら固有の特性から眼開きに役立つ理論を引き出そうと考えているが、彼自身が宗教や道徳について盲目であるから、このような主題を論じてもただ見苦しい迷路に陥ちこむだけである。以上がディドロ氏に起った事柄である⁽¹³⁾。

逆説的に言うならば、反対派は彼らなりにディドロの『哲学的思索』と『盲人書簡』が果たした重要な役割を認めているのである。だが彼らがもっとも恐れたのはディドロが編纂した『百科全書』である。

「百科全書。(この作品の歴史と批判) この作品が2人の著名な作家によって企画されたことは周知のとおりである。その1人ディドロ氏は『哲学的思索』によってまさしく注意人物であった。百科全書第一巻の印刷は1751年に終了した。トレヴーの記者たちはこの智識の倉庫の中に窃盗品や剽窃物や宗教と国家に反する不敵な思想のみを見た。こうした告発は政府を驚愕させた。1752年2月7日の政令によ

(13) Ibid., p. 94—96.

って刊行者たちの仕事は中断され、作品の発行は禁止された。だが時と友人と後援者がこの嵐を散らした。そこでこの作品は 1754 年には当初同様に刊行されつづけた。

政府は刊行者たちが宗教を尊重するであろうと高くくっていたがその裏をかかれてしまったのだ。彼らの辞典は善良な人士にとっては学問芸術のあらゆる要素の寄せ集めである以上に無信仰の火薬庫と見えた。そこには必要とあればエピクロス、ピルロン、ケルスス、スピノーザ、ホッブス等の錆ついた武器が磨かれてこそいないが少くとも修理され埃を落とされて見出されたであろう。正当な批評がトレヴーの記者の許に殺到した。百科全書にたいする堅実な反駁書が現れない年はほとんどなかった。アブラム・ショーム氏は多数の書巻において攻撃した。高等法院は 1759 年の判決を反百科全書派の著作に合流させたし、政令は特権を取消して百科全書に最後の打撃を加えた。検事総長ジョリ・ド・フルーリ氏はこの書の禁止を要求した立派な論告の中で自分らの不満を訴えるために裁判所に現れた社会や国家や宗教を登場させている。彼らの侵害された権利、無視された法律、昂然と横行し侮辱しても罰せられないと思ひこんでいるらしい無信仰、これらが權威の助けを請うために彼らをそこに導いた強力な動機である。フルーリ氏はこれら巷に溢れる醜悪な作品を眼前にして戦慄する人類、恐怖する市民、苦悶する大臣の姿を描き出している⁽¹⁴⁾。

以上からして反百科全書派（上掲の文中でも彼ら自身そう名づけている）の活動がジュジュイットの機関誌『ジュルナル・ド・トレヴー』の記者たちによって推進されていたことは明らかである。

因みに本辞典の序文の後に転載されているパリ高等法院の判決文（ヴォルテールの『哲学辞典』およびルソーの『山からの手紙』にたいする）は当時の所謂禁書の典型と思われるので訳出しておこう。（但し判決に先立って行われたフルーリの論告は省略する。）

「本院は上記二種の印刷物が司法執行官の手で裁判所の大階段下で

(14) Ibid., p. 101—102.

破棄焼却されることを命ずる。これらの書物を有する人々はすべてそれを本院の書記の許まで持参し廃棄してもらうよう命ずる。あらゆる印刷所，書店，小売屋その他にたいしては，それらを印刷し販売し小売りし或いは分配することを然るべき罰則の下に禁ずる。検事総長の要請により，本院が任命する報告官を経て，上記二種の印刷物を作成し印刷し販売し或いは分配したであろう人々には，検事総長に伝達された調査によって，検事総長より然るべき追究を受け，本院より然るべき命令を与えられるよう通告されることを命ずる。さらに本判決は印刷され公表され必要な一切の場所に掲示されるよう命ずる。以上は高等法院にて全員出席の下で 1765 年 3 月 19 日に決せられた⁽¹⁵⁾。」

この判決は旧ジェジュイットたちにとって最大の復讐であり反百科全書派にとって最高の勝利と映じたにちがいない。こうして彼らがフィロゾーフにたいして公然と反撃を行えた背後には高等法院の完全な反動化を見逃すことはできない。というのも，高等法院がその長い歴史の中では王権や教権に反抗して前進的役割を演じたことが少なかったからである。だが新たな階級のフィロゾーフの優勢が確立されそうになるや，高等法院は旧体制下における彼らの特権に固執しはじめたのだ。この逆行的権力に乗じたのが旧ジェジュイットの反撃である。

ジェジュイットの追放によって従来のフィロゾーフ対ジェジュイットの特権関係が哲学者対宗教家の一般関係に移行するや，両陣営のそれぞれの内部に思想的变化が生れてきた。特に異質な思想体系を有しながら現実的に協力してきたフィロゾーフの間には，敵対者との問題が一般化するにしたがって，ようやく原理的矛盾が表面化するにいたった。『自然の体系⁽¹⁶⁾』(1770)の著者ドルバックの活躍が問題となってくるのもこの時期(1766—1786)である。ドルバックは処女作『暴露されたキリスト教⁽¹⁷⁾』(1756)以来一貫して徹底せる無神論者であ

(15) Ibid., p. xx.

(16) D'Holbach: *Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde moral*, par M. Mirabaud, Londres, 1770.

り唯物論者であった。すでにヴォルテールはこのディドロの親友（ドルバックはダランベールやマルモンテルが脱落した後もジョークール等と共にディドロを助けて百科全書の完成に最後まで協力した）の著作に反感を示していた。反坊主義の闘士ではあったが理神論を越えることができなかつたヴォルテールは健全な哲学と同様に健全な宗教を許容するチュルゴアの現実主義の方に大きな期待を寄せていた。したがって一切の妥協を排して哲学と宗教の根源的対決に挑むドルバックの立場はフィロゾーフの共同戦線の中で新たな路線を形成することとなった。

最近すぐれたドルバック選集⁽¹⁸⁾を編註したポーレット・シャルボネル女史は「ドルバック氏の重い石の弾丸は戦闘が終った時にやってきた」と『自然の体系』の出版(1770)を皮肉ったルネ・ユベール氏を反駁してこう述べている。

「その戦闘は 1770 年に終わっていないし、現在もなお終わっていない⁽¹⁹⁾」。

この両氏の見解の相異そのものがわれわれの立論の正当性を証明してくれそうである。というのは、両氏は一つの事実をめぐって夫々片面の真理を伝えているからである。すなわちユベール氏が「戦闘は終った」と述べた場合の「戦闘」がフィロゾーフ対ジェジュイットの抗争と限定すれば「終った」と言うるし、シャルボネル女史が「戦闘は終わっていない」と述べる場合の「戦闘」が哲学者対宗教家のそれと一般化すれば今日まで「終わっていない」ことになる。したがって両氏とも 1770 年頃を堺として戦闘が新たなる段階に突入したという事実を見落しているのである。実際、ドルバックの論文中にはもはやジェ

(17) D'Holbach: Le christianisme dévoilé, ou Examen des principes et des effets de la religion chrétienne, par feu M. Boulanger, Londres, 1756.

(18) D'Holbach, Textes Choisis par Paulette Charbonnel, Paris, Edition Sociale, 1957.

(19) Ibid., p. 65.

ジュイットあるいは反百科全書派と名ざした個人的攻撃はほとんど見られないし、もっぱらキリスト教徒一般あるいは宗教家にたいする攻撃のみが見られるのである。また『自然の体系』がユベール氏が言ったように時期おくれに到着した弾丸でなかったことは本書が重ねた版数と外国語への翻訳によっても証明されよう⁽²⁰⁾。しかもドルバックの老大な著作のすべてが無名か変名（ミラボー氏あるいはブーランジュ氏の名が用いられた）で出版されていることは新たな段階の戦闘のきびしさを物語るものであろう。『自然の体系』についてだけでも、ヴォルテールやフリードリッヒの反駁はともかくとして神学者ベルジエ師の『唯物論の吟味、自然の体系にたいする反駁⁽²¹⁾』（1771）やドイツの哲学者ホーランドが仏語で書いた『自然の体系に関する哲学的考察⁽²²⁾』（1772）や古典学者ロシュフォールの駁論を挙げることが出来る。だからといってドルバックが孤立していたとかフィロゾーフの統一戦線を乱していたという結論を引き出してはならない。父親譲りの巨万の財産を有するドルバックはパリの自宅で毎日曜日大正餐会を催して政界や社交会の御歴々を招待し、木曜日毎に「ユダヤ教徒の日」と称して百科全書派の主要なメンバー（ディドロ、マルモンテル、サン・ランベール、モレレ、ガリアニ、グリム、ラ・グランジュ、ネジョン、チュルゴー）を招いて智識の交流につとめたのである。『自然の体系』をはじめとしてドルバックの作品には少からずディドロの

(20) Ed. Londres, 2 vol. 1770, 1771, 1781; Ed. Paris. E. Ledoux, 2 vol. 1821; Ed. Paris, Domère, 4 vol. 1822; The system of nature, or the laws of the moral and physical world, tr. from the french of M. Mirabaud. London, printed for G. Kearsley, 1797; Système de la nature ó de las leyes del mundo fisico y del mundo moral, por el baron de Holbach, con contas y correcciones por Diderot, traducido par F. A. F. Paris. Passon, y hijo, 1822, 4 vol.

(21) Abbé Bergier: Examen du matérialisme, ou Réfutation du système de la nature, Paris, Humblot, 1771, 2 vol.

(22) Holland (Georg Jonathan von): Réflexions philosophiques sur le système de la nature, 2 pt. Paris, 1773.

助言が行なわれたという経緯も無視することはできない。それはドルバック自身の言葉によっても明白である。

「実際、人間精神がいままで産み出した中でもっとも大胆な、もっとも特異な、この著作においてミラボー氏は彼自身の力働を超えているように思われる。彼の作品に充満する智識と探究からみて、彼が友人たちの智識を利用したこと、多くの註が後に書き加えられたことが充分信ぜられるのである」。『自然の体系』1777年ロンドン版の「刊行者序」、拙訳、旧日本評論社、古典文庫版、参照）

ドルバックの最後の作品は1786年に出版された『諸民族の自然的状態について、市民社会および諸国民の一般社会のもっとも重要な諸点に関する試論⁽²³⁾』であるが、彼が死亡したのは1789年であるから、ドルバックはフィロゾーフの数少ない殿軍の一人として大革命の寸前で闘いつづけたわけである。

この間にあってたえずフィロゾーフを攻撃しつづけてきた旧ジェジュイットたちが反百科全書派とか反哲学者という呼称にのみ甘んじていたであろうか。ヴォルテールの『一聖職者の手紙——パリにおけるジェジュイットの所謂再建について⁽²⁴⁾』(1774)が発表されたのはジェジュイットが追放されてから丁度10年目にあたるのである。

「1774年、3月20日。

大なり小なり変革が生ずる時はかならず根も葉もない噂が飛ぶものです、それは利害をもつ党派が彼らの意図を民衆に秘めておくことを必要と信ずるからでもあり、或いはむしろ、民衆が自ら盲目であろうとして無理に覚醒させられることを期待しないからであります。

現に、高位高官たちがジェジュイットの教団を別の名前と新しい形

(23) D'Holbach: De l'état naturel des peuples, ou Essai sur les points les plus importants de la société civile, et de la société générale des nations, [par J. F. Gravoty de Berthe] Paris, La Veuve Hérissant, 1786, 3 vol.

(24) Lettre d'un ecclésiastique sur la prétendu rétablissement des jésuites dans Paris, 1774, éd. G. Avenel t. 5, p. 662.

態の下でバリに設立しようと望んでいるという噂がまきちらされています。

われわれの大臣はそんな見解に組するにはあまりにも賢明であります。彼はつぎのような文句を金言とはしないでありましょう。

壊シ、建テ、四角ヲ円ニ変エル。

ホラテウス 』

また『百科全書』に神学および哲学関係の項目を担当して終始フィロゾーフに協力したモレレ師は後年（19世紀に入ってから）やはり同上の旧ジェジュイットの動きについて興味ある覚書を残している。

「この1773年という年については、私は一つの逸話を残しうると信ずる。それはジェジュイットを好まなかった人々にもまた1804年および1805年におけるようにジェジュイットをフランスに復活させようと試みた人々にもなんらかの興味のあることであろう。

その頃、ジェジュイットの復帰を容易にするために聖職者のうちに或る党派が形成されていたのだ。形勢は彼らに有利であった。人々はジェジュイットが公共教育のうちに残した大きな空隙に気づいていた。彼らを追放させた高等法院は解散し、モプーの高等法院がそれに代っていた。バリ大司教ポーモンや多くの司教たちが上流の保護に支援されて彼らより強力なイエズス会の勝利のために軽率な活動をしていた。ツールーズ大司教自身が私に時々言った、成程、諸君哲学者は全力を尽してジェジュイットを追い出した。ところで今度は彼らの学院の補いをつける手段を見つけなさい、それは国家に一文も負担をかけない教育でしたからねと。私は最善を尽して哲学者たちを擁護し、ジェジュイットの弁護者と充分に闘った。だがそうした意見を私は社交界すなわちドルバック男爵邸やエルヴェシウス邸でしばしば表明することがあったので、いっそ歌でも作ってジェジュイット復活の計画を素破抜き、この衰れた計画をくつがえしてやろうと思いついた⁽²⁵⁾」。

モレレ師が作った歌は八綴音五行詩で十七節におよぶ諷刺歌である

(25) Mémoires de l'abbé Morellet. t. I, p. 217—218.

が、やや晦渋のきらいがあるため一般に流行したと思われぬ出来ばえである。だが問題はそんな所にはない。重要なのはシャルボネル女史も指摘しているように戦闘は 1770 年で終ってはいなかったということである。モレレ師の活躍ぶりが彼自身の言葉以上であったことは、ヴォルテールが彼にモレレ（「彼らに噛みつけ」の意）という名誉ある渾名を献じていることから推察できよう。長命なモレレ師はフィロゾーフの唯一の生き残りとして大革命後にいたるまで旧ジェジュイットの内外の動静にたえず監視の眼を向けつづけたのである。この執拗なモレレ師の態度こそ反ジェジュイット闘争がフランス啓蒙運動の最大の出発点であり最高の成果であったことを証明するものである。

フランス啓蒙思潮を単に思想の流れとしてではなく運動さらに対立として把握すべきであると信ずるわれわれはジェジュイットにたいする闘争という場においてフィロゾーフの動きをたどってきたが、それは主として宗教および哲学の領域に限られていたから諸他の接点における彼らの対立についてはなお多くの問題が言い残されている。とりわけ教育上の問題は啓蒙運動そのものの性格からしてきわめて重要なものであった。はじめにふれたように教育の分野で果してきたジェジュイットの役割が大きかっただけに彼らの支配下および追放後のフランス教育界の在り方がたえず批判の対象となってきたのは当然である。こうした教育論議の発生が英国のロックの経験論哲学に負うものであったとは今日の定説である。コストによるロックの仏訳がはじめてフランスに現れたのは 1700 年であるが、18 世紀後半に入るや、コンディヤックの『感覚論』（1754）をはじめとしてグラフィニー夫人に宛てたチュルゴーの教育論書簡⁽¹⁾（1751）やルソーの『エミール』（1762）やエルヴェシウスの『人間論』（1772）等がいずれもロックおよびコンディヤックの思想に立脚してすぐれた教育論を展開するに到った。フ

(1) Oeuvres complètes de Turgot, éd. par G. Schelle, 1913, t. I, p. 241—255.

フィロゾーフの一員として多数の諷刺をジェジュイットに向けて発したコワイエ師は当時の学校教育についてつぎのような皮肉を飛ばしている。

「第 6 学年では何を学ぶか。ラテン語である。第 5 学年では。ラテン語である。第 4 学年では。ラテン語。第 3 学年では。ラテン語。第 2 学年は。ラテン語。自然や技術や有用な学問についてはなんの智識もない。事物はなく言葉だけだ。しかもどんな言葉か。国語をやらないのに。人間にとってもっとも適切なものについてはなにもないのだ。この長い貴重な時間が古典科の教程と名づけられている。それこそ野蕃きわまる人間愛である。……10 年あるいは 12 年もついやいして下手なラテン語の会話や作文をやり、年齢からしても理解しうるはずもない作家たちを説明したり、修辞学上の綾を切り張りして否応なしに駄弁に他ならぬ敷衍に入りこみ、良識を害うことを学ばせる哲学の諸原理に打ちこむことは、何たることであろうか⁽²⁾」。

こうした因習は学校教育のみならず家庭教育においても同様であった。すでに 1718 年クルーザは『児童の教育に関する新しき原理』の中で当時の家庭教師の在り方についてきびしい批判を行っている。

「人は子供に長い作文を書き取らせる。それを子供がラテン語に直すために用いる 2・3 時間こそは教師にとって楽しい時なのだ。特に、子供が仕出かした多くの誤りを叱らないというし配慮をもつならば。つとめが長びくことは教師にとって一向苦にならないものである、というのは、子供は気ままに二行書いては休み、また作文に戻っては果物を食べ、召使の所にお喋りに行き、戻って来ては、また友達と遊んだり取組み合いをやったり、こうして間を置きながら最後の文句にまでたどりつくからである。時折り何か風変りな文句に出会うと子供は大騒ぎをして父親に知らせるし、子供が書いた無茶な文章は人々を笑わせ、多数の訂正は教師の注意が行き届いている証拠となるのだ。作

(2) Cf. Les origines intellectuelles de la Révolution française, par D. Mornet, Librairie Armand Colin, 1954, p. 172.

文が終ると、父親はそれを子供の方だけで出来上った結果だと見るのである。こうして自分が通ってきた道が子供が通って行くのを見ながら父親はこの楽しい幻影の中で自分が再生し若返えってゆくのを感ずるのだ⁽³⁾。

この自惚と怠惰にたいしてどれほどルソーが大胆な攻撃を加えたかは改めて述べる必要はあるまい。だが全国で113校にのぼるジェジュイットの学院が1762年に閉鎖されるにいたって事態は一層切実なものとなった。

「1763年2月2日の勅令は、大学にも教団にも属さぬあらゆるコレージュのために、司教、当地駐在筆頭裁判官、検事、町役人2名、公証人2名、校長によって構成される事務局の創設を命じた。意見を吐くのは彼らであったが、彼らの仕事を助けるためにできるだけ多くの顧問が集められた。彼らは大いに才能をもっていたし、精力的に発言した。彼らが要求したものは、ロックやルソーのように遠い将来の目的や方策については各自見解を異にしたとはいえ、それは現実主義的な教育教化であった⁽⁴⁾。

もはや一般的教育論を論じている段階ではなかった。ここにおいて注目すべきはラ・シャロテの登場である。彼は『ジェジュイットの組織についての報告⁽⁵⁾』（1762）において街学と背理が織りなすジェジュイットの教育が2世紀間にわたってフランス国民を毒してきたと告発し5万以上の哲学教授を擁するも只一人の注目すべき哲学者をもたず、多数の文学教授を擁しつつも傑作は現れず、2千の数学教授を有しながら数学者をほとんどもたなかった、とジェジュイットを非難したのである⁽⁶⁾。彼は1763年3月24日レンヌの高等法院に有名な『国民

(3) Cf. *La pensée européenne au XVIII^e siècle*, par P. Hazard, éd. Boivin, t. I, p. 263.

(4) Op. cit. p. 172.

(5) *Compte rendu des Constitutions des Jésuites*, parprocureur général au Parlement de Bretagne [L.-R. Caradeuc de la Chalotais] 1, 3, 4, 5 déc. 1761, 1762.

教育論⁽⁷⁾』を提出した。それは国家的統制の嫌いはあったがジェジュイット追放後の最初の教育再建案として注目すべきものであった。

だが彼らの教育改革の道は決して容易ではなかった。エカテリーナ女帝に依頼されて作成された『ロシア政府のための大学案』(1775)においてもディドロはどれほどの実現性を期待しえたであろうか。プロシヤにおけるバーゼドー⁽⁸⁾の教育改革にしても容易ならぬ事業であったはずだ。というのも、コンドルセの『革命議会における教育計画』(1792)が一つの理想案として高く評価されつつもたえず現実的修正や批判が加えられて実施をみるにいたらなかったのが当時の実状であったからだ。だが大局的にみれば教育理念の進歩は画期的であった。そこには従来のある学校における非生産的教程にたいする功利主義的反撥が主要な因子としてはたらいっていたのである。

「昔は神学者や宣教師のみを養成しようと思っていたが、今やわれわれは啓蒙された人間を陶冶しようと思んでいるのである」。 (コンドルセ『革命議会における教育計画』渡辺誠訳、岩波文庫、第36頁)

またこの啓蒙から陶冶へというコンドルセの表現こそ半世紀以上にわたったフランス啓蒙運動の或る終局点を示すものである。

(6) Cf. Helvetius, his life and place in the educational thought, by Ian Comming, London, Routledge et Hegan Paul Limited, 1955, p. 160.

(7) Essai d'éducation nationale, ou plan d'études pour la jeunesse, 1763, IV—145 p.

(8) Cf. Pro summis in philosophia honoribus rite consequendis, in-
usitatam eandemque optimam honestioris juventutis erudiendae
methodum, tum in reliquis studiis scholasticis, tum praecipue in
lingua latina……praeside……Jo. Christoph. Hennings……anno 1752,
die 7 junii……dijudicandam dabit Joannes Bernardus Basedow. Ki-
liae litteris G. Bartschii, 40p.